

ブルアカ集團食中毒小説誌

ゲヘナ学園と地獄の一日



R18  
ADULT ONLY



ブルアカ集団食中毒小説誌『ゲヘナ学園と地獄の一日』目次

プロローグ	……004
第1話 ゲヘナ学園・部室棟本館3階 生徒：アカリ、イズミ、ジュンコ（美食研究会）	……007
第2話 ゲヘナ学園・風紀委員会本部 生徒：チナツ、ヒナ、アコ、イオリ（風紀委員会）	……015
第3話 ゲヘナ学園自治区郊外 生徒：ムツキ、アル、ハルカ、カヨコ（便利屋68）	……030
第4話 シャーレ執務室 生徒：イロハ（万魔殿）	……053
第5話 シャーレ併設カフェ1号店 生徒：メグ、カスミ（温泉開発部）	……062
第6話 ゲヘナ学園・部室棟本館1階 生徒：ヒナ（風紀委員会）、セナ（救急医学部）	……072
第7話 ゲヘナ学園中央区 生徒：ハルナ（美食研究会）、ジュリ（給食部）	……083
第8話 ゲヘナ学園・旧校舎 生徒：フウカ（給食部）、ハルナ（美食研究会）	……097
エピローグ	……112
あとがき／できすとりん	……113
あとがき／めのりあ	……116
参考文献	……117
奥付	……118
小説：できすとりん／表紙絵・挿絵：めのりあ	

## ゲヘナ学園と地獄の一日

## ブローグ

「先輩、なんだかともない量のジャガイモとお肉が来ちゃったんですけど……一体どうしたら良いんでしょうか……」

日曜日の昼下がり。誰かに捕獲されることも連行されることもない本当の休日を楽しぶりに味わっていた愛清フウカは、部屋の中に着信音を響かせた携帯電話を手を取った。

（休みの日にジュリから電話が来るなんて珍しい……いやそんなこと言ってる場合じゃないよね、なんかものすごく焦ってるみたいだし）

休日にわざわざフウカに電話を掛けてくる人間として思い浮かぶ筆頭候補は、隙あらばフウカを連行し料理を作らせようとする一人のテロリストだが、今日の電話の主はどうやら異なるようである。電話口から聞こえてくる声になんか安堵したのも束の間、普段よりも明らかに焦り、そして泣きそうな後輩の声を聞き、フウカは別の意味で背中に寒い風が吹き付けたような感覚に陥った。

「お、落ち着いてジュリ。何があったか、順を追って説明して」

「えっと、金曜日之夜に、次の週の給食に使う食材を注文したんですけど……」

金曜日夕方と言えば、フウカとジュリが二人で集まって翌週の給食の献立を考えることにしている時間だ。近所のスーパーに買い出しに行き、米やバターなどの消耗品を補充しつつ、安くなっている食材で翌週の献立を決める、給食部にとって一番大事な会議。

「覚えてるよ。いつもの業者さんでお肉が安かったから、確かまとめ買いしたんだよね」

「そうなんですけど……注文したときに、ゼロの数を間違えちゃったみたいで……」

背筋が凍るような気がしたのはこんな事態になる予感がしたからかもしれない、とフウカは今になって思い返していた。トラブル続きの給食部でやりくりを続けて一年半、色々なトラブルに見舞われてきたが、注文数量を間違えてパニックになるのは久しぶりかもしれない。（あの時頼んだのって、確か一キロだったよね……ってことは、十キロのお肉が来るのかあ……まあでも、なんとか冷凍庫に押し込んだらええしばらくは保存が利くし）

「ってことは、食堂に十キロのお肉が来るってこと？」

「あ、あの先輩……お肉、十キロじゃないんです……」

「お肉が、一〇〇キロも来ちゃったんです……わああああん！ ごめんなさいフウカ先輩！」

泣き叫ぶ声を聞いて、フウカは自分の部屋の中で膝から崩れ落ちそうになった。食堂の倉庫を埋め尽くす、一〇〇キロの豚こまぎれ肉……想像したくもない光景だろう。

「ジュリ、まさかゼロを2つも間違えちゃったの!？」

「はい……。あと、ジャガイモの量も間違えちゃって……ジャガイモは二〇〇キロ来るみたいなんです……」

前言撤回だった。このレベルのトラブルは久しぶりどころの騒ぎではなく、フウカがこの学校に来て以降間違いなく最大級のものだ。肉が一〇〇キロに芋が二〇〇キロ、とんでもない量の食材が、ゲヘナ学

園の食堂に押し寄せようとしている。

「そ、それで……その大量のお肉とジャガイモが、いつ到着するの？」

「日曜日の夜に到着するみたいですよ……なんでも、昼間に搬入するにはトラックの数が多すぎるから、つてわざわざ連絡があったので……」

「日曜日、つて今日じゃない!? え、待って、あと四時間で三〇〇キロの食材が食堂に納品されるの……?」

「そうなんです……どうしましよ先輩……私、もう……」

泣きそうなジュリの声など、耳にしたのはいつぶりだろうか。食堂の厨房でモンスターを生み出したときも、重い段ボールを何箱も抱えてスパーまで雪道を往復したときも、ここまでの弱音を聞いたことは少なくともフウカには一度もなかった。それほどまでに今、電話口の向こうのジュリは慌て、焦り、そして弱っている。

泣きじゃくる先輩を前にして、フウカが取ることのできる行動は、唯一つ。

「落ち着いてジュリ。私になんとかするから」

「先輩……?」

「一時間後に食堂に集合ね。とにかく作戦会議からよ」

そう言い残してフウカは電話を切ると、荷物をまとめて食堂を目指した。

——どんなモンスターよりも恐ろしい、三〇〇キロの食材を迎え撃つために。



月曜日、午前七時。

ゲヘナ学園給食部の運営する食堂には、学園生が長蛇の列を作っていた。

「ねえ、これだけ並んできるとカレーライス途中で売り切れちゃわないかな」

「大丈夫だと思いますよ。なにしろ千人前は用意してあると書いてありましたから」

「むしろ問題は味じゃないの? 急にカレーの大安売りなんて不安じゃない?」

「……そこは心配いらなんでしょう。何せゲヘナ学園の誇る給食部が作るカレーですから」

長蛇の列のあちこちから、生徒達の不安と期待に満ちた会話が聞こえてくる。給食部が所有している公式SNSアカウントが急に稼働して一件の投稿が拡散され始めたのが、昨日の午後八時過ぎのこと。そのポストには、「明日午前七時より、ゲヘナ学園食堂でカレーライスの大安売りを行います。普通盛り百円、千人前限定です」という慣れない文章とともに、これまた不慣れなデザインのカレーの画像が添付されていた。そのチラシは紙にも印刷され、食堂の窓ガラスにセロテープで留められている。

そのチラシと宣伝投稿の制作者——給食部のたった二人のメンバー、フウカとジュリは、開店時刻寸前になっても未だ厨房でせわしく働いている。

「ジュリ、お米は炊けてる?」

「ええと……はい。ひとまず五〇〇人分は炊き上がっています。さつ

き炊き始めたお釜で二五〇人分のご飯ができますから、全部で七五〇人分は……」

「なら大丈夫ね。残りの二五〇人前はカレーを出しているうちに炊き上げられると思うから。カレーもなんとか千人前作ったし、これできんとか開店できる……」

「先輩、ありがとうございます……ほんとに、ごめんなさい……！」  
「まだ言わなくていいよ。お礼はこのカレーを全部捌ききってから言つて」

疲弊した表情のフウカとジュリが見つめた先には、床の壁際に横一列に並べられた大きな寸胴鍋が八つも連なっていた。更にガス台の上には同じサイズの寸胴鍋が二つ乗せられており、この空間だけでも寸胴鍋が十個も用意されている。そのそれぞれに一〇〇人前のカレーが入っているから、全部で千人前のカレーというわけであった。

「こんな量のカレーを徹夜で作ったの、生まれて初めてだったわね……」

寸胴鍋の個数は十分な数が合ったものの、この食堂の厨房には残念ながら寸胴鍋用のガスコンロが二つしか用意されていない。故にフウカは鍋二つ分のカレーを同時進行で調理し、それを五回も繰り返してなんとかカレーを作り上げていた。混ぜるのも一苦労のカレーを大鍋で作り、完成したら冷めるのも待たずにジュリと二人がかりで鍋を移動させ、そして休む暇もなく次のカレーを作る……昨日の午後九時から一晩中カレーを作り続け、フウカはなんとか千人前のカレーを完成させたのだ。

「私、もうどうぶんお肉は見たくありません……」

「私もよ、つていうかあんな量のお肉なんて見たくてももう見られないわよ……」

こんな大量のカレーを作ることになった元凶ともいえる一〇〇キロの豚肉は、二人がかりでひたすら切り分けられて、今はもうカレーの鍋の中に沈んでいる。倉庫を埋め尽くすほどの段ボールの山として搬入された三〇〇キロの食材は、思い出すだけで吐き気がしそうなトラウマになってしまっていた。

一〇〇キロの豚肉を冷凍するだけの冷凍庫は、ゲヘナの食堂には備えられていない。加えて二〇〇キロのジャガイモも保管できるような場所がなく、悩んだ末にフウカが選んだのが全てをカレーに加工してしまうことだった。無事に全ての食材を「ジャガイモと豚肉だけのカレー」に調理し、最大の難関を乗り切ったフウカだが、まだやる事が残っている。

「あ、先輩。午前七時になりました。食堂、開けますね」

「うん。……ジュリ、もう一踏ん張りだからね。頑張るわよ」

「……はいっ、先輩！」

作ったカレー千人前を皿に盛り提供するという果てしない作業に、フウカは泣きそうな顔をなんとか堪えて臨むのであった。

第一話 ゲヘナ学園・部室棟本館三階

午後一時過ぎの美食研究会の部室には、ハルナをはじめとする四人のメンバーが全員そろっていた。学校の授業でさえも教室に集まって受ける授業ではなくブルーレイディスクで済ませるこの世界において、昼間からそれぞれの部室に生徒達が集まっているのは何ら珍しいことではない。

そしてまた、部室の中央にある大きな木製のテーブルの上に、十分を超えるお弁当や料理の皿と残骸が広がっているのもまた、たった四人しかいないこの美食研究会という部活動において全く珍しい光景ではなかった。

「ハルナがわざわざカレーの食べ比べをするって言い出したからゲヘナ中のコンビニとかでカレーを買ってきたのに、ハルナが一番食べたくないってどういうことなの!？」

「そう怒らなくてください、ジュンコさん。……私はただ、朝から調子に乗ってカレーを大盛りにしてしまったせいで、お腹が減っていなかったのを忘れていただけですわ」

「だーから!! それが酷いって言ってるの! うう、自分カレーライスは見たくないわ……」

「……ジュンコさんも、ハルナさんのことを言えるほどは食べていないのでは?」

「そりゃあんだ達に比べればね! アカリもイズミも当たり前のようにカレーを五皿ずつも平らげないでよ……」

美食研究会の部室に用意されたソファーに腰掛け、苦しそうにしな

がらお腹を撫でているのが、この美食研究会の会長であるハルナ。そしてその隣で同じように青ざめた表情を浮かべ、思い切り叫んだことで気持ち悪そうに口元に手を当てたのがジュンコだった。そしてその横でけろっとした顔をしているのが、アカリとイズミの二人である。

一見すればハルナとジュンコが、この十数枚もの皿にのついていたカレーを平らげたのだと勘違いしてしまいそうだが、実際は全くもってその逆である——ハルナもジュンコも、わずか一人前も平らげることができていない。残りの全てを食べ尽くしたのは、未だけろっとした顔で、まだ何か食べ足りないような顔すら浮かべているイズミとアカリだった。

「それで皆さん。これだけのカレーを集めてきたことで……今朝のフウカさんが作ったカレーに何が足りなかったのか、突き止めることはできましたか?」

そう言うと、ソファーの背もたれから体を起こしたハルナがえらくキリッとした表情で部室の中へと語りかける。これだけの量のカレーを美食研究会だけで食べようと言いだしたのも他ならぬハルナであり、その原因はもちろん、今朝方ゲヘナの食堂で振る舞われた大安売りのカレーであった。

「うーん、どうでしょう。私は今朝のカレーも美味しかったと思うので、よく分かりませんね」

「えっとね、きつとイチゴジャムが足りなかったと思うの! お昼に食べたカレーも、イチゴジャムを掛けたらイチゴの味がして全部美味しかったから!」

「……それ、カレーが美味しいんじゃないかってイチゴジャムが美味しい

んじゃないの？」

聞こえてきた様々な意見——もとい感想を聞き、ハルナが小さくため息をつく。ハルナの反応ももつとのだが、同時に残りの三人からしても仕方ない感想だった……なにしろジュンコ達は、ハルナの突発的な行動に付き合わされただけなのである。たいしたことすら考えずにカレーを平らげてしまっていたのも、無理のないことだった。

ハルナが口を閉じてしまったことで、美食研究会の部室には静かな空気が流れる。とはいえ、その静寂は長く持たなかった。

ゴキュルルルルルッ、ギュルルルルル……。

「……？」

ジュンコが首をかしげながら音のした方を振り向くと、そこにはアカリが座っている。お腹の音の主がアカリであることは、もはや疑いようがない。

「なーんだ、アカリのお腹が鳴ったのね。あれだけ食べてまだ食べ足りないの？」

「え、いえ……その……」

この部、いやアカリにとって、食事を食べた後に空腹でお腹が鳴ってしまうことはあり得ないことではなかった。無尽蔵と思えるほどに食べ物を入れることのできるアカリの胃にとって、カレー五人前もその容積を満たすことのできる量ではなかったのである。食べ放題に行き当たり前のように数十人前を食べ尽くし店員を泣かせているアカリには、数人前の食料はおやつ程度の感覚でしかない。

いつもならこの流れで、アカリは別の食べ物を口に運んでいたことだろう。だが今日だけは、アカリはそうしようとせず——そしてすぐ

に、お腹をさすりつつ椅子から立ち上がった。

「……アカリ？ どうしたの？」

「いえ、ちょっとお手洗いに行ってきますね。しばらく掛かるかもしれませんので、皆さん気にしないでくださいね」

そう言い残すと、アカリはすたすたと部室を出て行く。技和佐時間が掛かると言いだした時点で、トイレで何をしようとしているのかは容易に想像がついてしまう。部室に残った三人も不思議そうな表情をしながら、珍しく食後すぐに大きい方をするためにトイレへと向かうアカリのことを見守ることしかできなかった。

その一方で、部室のドアを閉めて廊下へと出たアカリは、小さくため息をついてから立ち止まり、お腹をぎゅうっと押さえた。

ゴポポポポポポポッ……ギュウーッ!!

（こんなにお腹が痛くなるなんて……結構久しぶりですね。こう見えてもお腹は丈夫な方ですし、学校で催すこともめつたにない体質のはずなんです）

食べる量の多いアカリだが、便意を催す時間や回数というものは食べる方に比べれば異常さが際立つこともない。基本的に催すのは朝晩の二回で、どちらも食後に催すので学校など出掛けた先で済ませることになるのは月に一度あるかないか程度だった。規格外なのは、その一回辺りに出すことになる量だけである——一般的な女子学生のものより一回りも二回りも大きいものを何回も出すので、家で済ませなければ落ち着いてできないほどだった。

しかし、だからこそアカリは、変なタイミングで催すことのないよう気をつけながら生活を送っている。それ故に彼女が、学校で便意を



催す——それもお腹を下して下痢の便意を感じるといのは、非常なまれなことだったのである。

(……落ち着いて済ませられないですし、そもそも流れきるかも不安が残りますが……とにかく、トイレに行かないと。自分の部屋のトイレに戻るは無理ですね)

慎重に状況を把握して、アカリは一番近くにあるトイレを目指すことにした。三階建てになっている部室棟本館のうち、美食研究会の部室があるのは三階。廊下の把持にある階段の横に、トイレは用意されていた。

この時間でも部室棟にはそれなりの生徒が足を運んでいるはずだが、三階にわざわざ来ている生徒はあまりいない——そもそも三階に部室のある部活は少し隔離されている節のあるものばかりで、例を挙げれば美食研究会に温泉開発部……要するに風紀委員会に目をつけられている部活が押し固められているというわけであった。

人がいなければもちろん、トイレに誰かがいるということもない。女子トイレは個室が二つしかない少々狭いものだったが、そのどちらにも鍵は掛かっていなかった。一応大便をする恥ずかしさからアカリは奥の個室を選んで、鍵を掛ける。

「学校でウンコをするのも久しぶりですね……。というより流れると良いんですが……んっ」

アカリにとって、学校のトイレで排便すること自体には特段大きな問題があるわけではない。出るものは出るのだから、恥ずかしがるものではないというのがアカリの基本的な考え方だった——彼女が唯一心配しているのは、便器が元通りになるか、それだけだ。

スカートをまくり上げながら白の下着を一気に膝までずり下ろして、便座に腰掛ける。最低限ウォッシュレットだけは付いている少し古めのトイレの便座に座った瞬間、今までなりを潜めていたアカリの肛門は一気に隆起し、中央に窪みを作った。

ブスブスススッ、ニチニチニチニチニチニチニ——

お腹を下していた感覚とは裏腹に、出てきたのはしっぺり水分が吸収され、形の保たれた一本の大きな大便。この大便は本来、後ろから下痢便に押し流されることがなければ、きっと今日の夜に自分の部屋のトイレで出していたはずのもののだろう。

それは予定より早く外に出てしまった大便であり——同時に、後ろに控えている大量の軟便や下痢便をせき止めてくれていた、栓代わりの存在でもあった。その栓が抜けたことによって、アカリの肛門はいよいよ、全ての緩い便が素通りできる状態へと変化したのである。

——ブブリブリブリブリジュルルルルルルッ！

「んっ……んううう……っ、うんっ……！！ お腹、しっぺり下しちゃったみたいですね……こんなにお腹が痛くなるのも、久しぶりかもしれません……ふんっ！」

ブビビビッ、ブウウウウッ！ ビチビチビチビチ!!

他の人よりも一回り近く近い大腸の中を、大量の下痢便がグルグルと回っているのが分かる。お腹にそっと右手を当ててみれば、お腹の奥の方に感じる痛みと連動して大腸が収縮を繰り返しているのが手のひらに伝わってきた。

痛みを耐えかねて、少し上半身を前に倒す。お腹が物理的に押され、水風船を絞るような形でアカリの大腸は再度、下痢便を直腸に送り込



少なくとも三回、多ければ五回以上はトイレに駆け込んで緩い大便を出す生活を送っている。ゲテモノを食べてもお腹を壊さない、とイズミはよく言われているが、それはあくまで、他の人のように酷く下さないというだけである。

ピチッ……ブツビイイイイッ！ ブジュルルル……。

「ふうっ、んっ！ はあ、ううっ……」

トイレに駆け込んだばかりのイズミの排泄は勢いが凄まじく、やはりその音が大きく女子トイレの中に響いている。ガスが多めのイズミの下痢便は肛門で弾け、洋式便器の中で反響することで余計に音を奏でていた。

(もしかして、イズミさんもお腹が……だったら、私も遠慮せずしちゃって良いですよね)

ブポップブポップリリリリイーンッ!! ふうっ!

隣からの音を聞きながら、アカリもそっとお腹に手を当てる。イズミがやってくる足音を聞いたこと、いったん排泄の勢いを抑えていたものの、次第に我慢の限界が近づいてきていた。すでに茶色く汚れたお尻の穴が、再度開こうとしてヒクヒクと震えている。

ブビュルルルッ……ポトツ、ブチチチチチ……。

最初はドロドロの下痢便をゆっくと、便器の中に垂らすようにひり出していく。我慢していた時間が思っていたよりも長くなり、いきなりお尻の穴に力を入れても、出るものが中々出ていかない。少し直腸の中の重さが下の方に動いていくのを待って、アカリはもう一度お腹に力を入れた。

ピチチチチチブブブリリリリリッ、ビュウウーンッ!!

女子トイレの中に、二人分の排泄の音が響き合う。ドロドロで粘性の高いアカリの下痢便が便器の中に落ちていく音と、ガスの混じった液状の下痢便がイズミのお尻の穴で弾ける音の2つが、トイレで二重奏を奏でていた。

イズミの第一波の排泄が収まったタイミングで、少し上体を起こしたアカリが声を掛ける。

「イズミさんも、お腹が痛いんですか？」

「うん……なんかいつもより下痢気味かも。アカリもお腹壊しちゃったの？」

「はい、私はめったにお腹が痛くならないんですが……今日は珍しくダメですね。カレーを食べ過ぎちゃったからでしょうか？ ……んっ、んっ！」

ブボボボツ、ブチュルルルルルッ……。

「あ、そうかも。辛いもの食べるとお腹壊すって言うよね」

「では、ハルナさんもジュンコさんも、じきにお腹が痛くなるかもしれないですね」

「確かに。でもあの二人はあんまりカレー食べなかったから、大丈夫じゃない？」

そんなことをイズミが口走った瞬間。女子トイレに近づいてきている足音が二つあることに、イズミとアカリも気がついたようだった。

「……これって」

「そのままか、みたいですね☆」



部室を出たジュンコとハルナが、連れだって廊下を歩いている。あまり二人で連れ立って行動することのない組み合わせ——というのほさておき、やはりそれ以上に異質なものは、顔を青ざめさせてお腹を抱えながら歩いているジュンコと、そのジュンコを先導するかのようになを歩くハルナが、薄っすらと額に汗をかいているという個々人の光景だろうか。

「と、とにかくそのトイレに……」

「手近なトイレはおそらく意味がないと思いますが……イズミさんもアカリさんも、なんだか普段より様子がおかしかったです……きつと、時間が掛かると思いますよ?」

「そ、そうかもしれないけど!　もしかしたらすぐ出てくれるかもしれないじゃん!」

もはや二人も、程度の差こそあれどお腹を下しているのはもはや明らかだった。部室の中で急激に催し始めたジュンコがトイレに向かい、それを追いかけるようにハルナもだんだんお腹が下り始めたところだろうか。トイレを求めて歩くジュンコはとにかく近いトイレに行こうとし、それを聞いたハルナはあまり良くない予感を覚えながら歩いているという状態。そして近いトイレの個室は二つで、ちょうど離席しているメンバーの数も二人である。

とはいえ別のトイレまで通り道である手近なトイレの様子を見ないという手もないと思つたのか、ハルナはジュンコに押されるように女子トイレの扉を押し開けた。

プボポボポッ、プウウウウウウウッ!

「……予想通りですわね。ここまで酷いとも思いませんでしたが……」

「うう、そんなあ……。ねえアカリ、イズミ、まだかかるの?」

「その声……ジュンコとハルナ?　うう、ごめんね……。なんか、すぐお腹が痛くて、全然止まらないの……」

「私もお腹を壊してしまっていて……カレー、食べ過ぎたのかもしれないね。ごめんなさい二人とも、まだしばらくは……」

ジュンコとハルナの足音が聞こえ始めた頃にまた差し込みが入ったのか、アカリもイズミも再びわき上がってきた便意と格闘している真っ最中だった。会話の端々で聞こえてくる水っぽい破裂音が、二人の腹具合を明確に物語っている。

とにかく二人が自分たちから出られないのは明らかだった。ジュンコもハルナも諦めたような表情で、女子トイレを後にする。

「……とりあえず、下の階に行ってみましょう」

ハルナの言葉を聞き、ジュンコは榛名を追いかけて下の階へと階段を降りていく。すぐそこにある女子トイレの扉を開けると、そこらには空いている個室が残っていた。

「一つしか……ありませんわね」

「なんで、こういうときに限って……」

二階の女子トイレも、やはり個室が二つという構成。そして奥側の個室には、鍵が掛かっている。空いている個室は一つだけであり、それはつまりジュンコとハルナのどちらかは空き待ちを強いられると言うことを意味してもいた。

……否、そもそも空き待ちという概念が成立するのかもしれないところ、問題がある。

「んっ、んう〜っ……。おなかない……」

ゴロゴロゴロゴロゴロロッ……。ぶっ、ぶびびびっ！

誰の声なのか、ハルナにもジュンコにも心当たりはない。しかしトイレに入った瞬間に聞こえてきた、アカリやイズミたちの使っているトイレと同じような音とにおいは、考えられる中で最悪に近い状況であることを示していた。

「……ジュンコさん、トイレを使ってください」

「そ、それは嬉しいけど……でも、ハルナもお腹痛いんじゃないの」

「ええ。ですがこのまま立ち尽くしているだけでは、どちらの間にも合わないという最悪の結果しか待っていませんわ」

「でも……だとしたら、ハルナはどうするの」

「まだ他のトイレもありますから、そこを探しますわ。一階にもトイレはありますし、少し歩けば第一校舎も遠くありません。少なくともジュンコさんよりは私の方が余裕があると思うのですが」

「うう……で、でも」

「さあ、早く。ジュンコさん」

ハルナに押し込まれるように、半ば無理矢理入れられる形でジュンコは個室の中に入った。待望の白い陶器を見て、ジュンコは本能的に扉を閉じ、鍵を掛ける。外の世界のことなど忘れたかのように、ジュンコは一心不乱に下着を下ろして、便座に腰掛けた。

プビビィィィ……ピチュルルルピチピチピチィィィ！

小さな体に溜め込まれていた大量の下痢便が、一気に肛門へと押し寄せる。直腸の中に溜まり、ドロドロに動いていた液状の大便は一瞬のうちに、透明だった便器の中の水を茶色に染め上げた。音もに

おいも、先ほどから閉じている隣の個室と全くもって同質なものに変化していく。

(ハルナ、ごめん……でも、ありがとう……)

ジュンコが心の中で、個室の外にいたであろうハルナに向かってそう呟く。聞こえるはずのない呟きが向かう先であるハルナはといえば、ちょうどトイレの扉を開けて、外に出たところだった。

「はあ、はあああっ……！」

ぶすすすっ……。ぶう〜っ、ぶびびびび……。プッ！

扉を閉め切った瞬間、ハルナは左右を見回して廊下に誰かがいないことを確認する。そして直後、僅かにお尻の穴に抱えていた力を緩め、直腸の下の方に溜まっていたガスを空気中へと解き放った。廊下の一角で、たちまち周囲ににおいが拡散していく。

(ジュンコさん、なんとか間に合ったようですね……。あとは、私自身の入るトイレを探さないといいませんが……アカリさん、イズミさん、そしてその誰かにジュンコさん……。これだけの人数が同時に下痢をする……。なんだか、嫌な予感がしますわね。急ぎませんと)

そして、同じことを考えていたのは、トイレに入ってやっと一息ついたジュンコも。

(はあ、漏らすかと思っただけでなんとか大丈夫だった……。でも、なんだろ……。イズミもアカリもお腹が痛くて、私も……。それに、隣のこの人が下痢してるのって、偶然なのかな。本当に、カレーの食べ過ぎだけの……。?)

嫌な予感がしつつも、ジュンコは再び自分の腹が下り始めたのを感じ取って、また自分の排泄へと意識を取られていく。

ゲテモノに耐えうる胃を持っていたとしても。

数十人前の料理を平らげる胃を持っていたとしても。

そんな超人的な胃を持たないのであれば、尚更のこと。

生物学的な汚染を前にすれば、胃腸は為す術もなくその異物を追いつけず他になくなってしまう。

そのことを彼女たちが身にしみて理解することになる時間は、もう目前に迫っていた。

## 第二話 ゲヘナ風紀委員会本部

ゲヘナ中央区の中でも一番しつかりとした造りだと言われている、風紀委員会本部。その建物の一番奥にあるのが、風紀委員長をはじめとする幹部メンバーが仕事をしていることも多い風紀委員長室だった。分厚い木材出てきた重厚な扉が、その部屋と廊下とを様々な意味で隔てている。

月曜日の午後は、そんな風紀委員会の週次定例が開かれる時間と決められている。風紀委員長長のヒナに書記を務めるアコが今週分のレクチャーを行っており、それ以外にもイオリ、チナツの二名が空いているテーブルを使って書類を片付けていた。

「……以上になります。今週のトラブルは三四件でした」

「今週も多かったわね……トラブル以外の報告は何かあるの？」

「何もありませんね」

「そう。……じゃ、お疲れ様。私はここで書類を書くけど、アコはどうするの？」

「私も少し作らなければならない議事録があるので、ここで作業をしようかと」

定例報告、もとい一週間分のゲヘナ敷地内で起こったトラブルのレポートの報告を受けて、ヒナがげっそりとした表情を浮かべる。小さくため息をつきながらヒナが風紀委員長長の椅子へと戻り、アコはそのまま週次定例の報告書を片付けると、パソコンを取り出して午前中の会議の議事録をまとめ始めた。

作業用スペースと化した風紀委員長室に、キーボードを打つ音と紙

をめくる音、それにペンが走る音だけが響いている。四人それぞれが黙々と作業を進める中、チナツがふと立ち上がったのは一〇分ほど経った頃のことだった。

「ヒナ委員長、ちょっと書類を第一校舎まで届けてきますね」

「うん、ありがとう。別に私も後で顔を出すから、まとめて持つて行くわよ？」

「ありがたいですが、私もちょうどお手洗いに行きたかったのです。あちらで済ませがてら書類を渡してきますね」

「……そういえば、この建物のトイレは壊れちゃったんですって」アコがパソコンのモニターから顔を上げて外を見ながらそう呟くと、他の三人もつられたかのように同じく顔を上げた。もともとこの風紀委員会本部の建物はトイレが一階にしかないのに、先週の終わりにそのトイレで水道管が壊れてしまったのだ。現在は使用禁止となっているので、トイレを使いたければ手近な校舎に足を運ばなければならぬ。

そういう意味では、書類を届けながらトイレを済ませてくるというのは合理的な行動の順番と言うこともできる。チナツは書類をまとめてクリアフォルダに入れると、それを持って立ち上がった。

「……別にこのトイレ、使って良いのよ？ 一応、防音材も貼り付けてあるし」

「いえ、それには及びませんので。では、行ってきますね」

ファイルを持ったチナツが席を立ち、静かに扉を開閉して委員長室を出て行く。その姿を軽く見送ってから、ヒナは再び視線を目の前にある書類の山へと戻した。

扉が閉まった瞬間、むしろ表情を大きく変えたのは、部屋の外に出たチナツの方だった。

「ごろろろろろろ……ギョルルルルルルッ。」

（はあ、はあ……うっ。なぜ、急にお腹が……食べ過ぎた記憶もないですし、朝食のカレーが少し多かったのでむしろ減らしたはずだったのですが……）

書類一式を左手で抱えて右手を空け、その手をそつと下腹部に当てる。ギョルギョルという鈍い音が手のひらに伝わってきて、お腹の調子が急激に悪くなっていくのが分かった。書類仕事の最中には「なんとなく」程度だったお腹の痛みが、一歩一歩廊下を進む度に猛烈な痛みと便意に変化していく。

廊下を進んで角を曲がり出入り口が見えてくると、左手の壁沿いに赤と青の並んだ人型のマークが目に入る。しかしその入り口には「下水道の故障につき使用禁止」という張り紙とともに黄色いテープが貼られ、立ち入りが規制されているところだった。

（このトイレが使えれば何も悩む必要はなかったのですが……はあ、とはいえ大きい方を済ませるのに、わざわざヒナ委員長用のトイレを使うというのも気が引けますし）

この建物にあるトイレは基本的にこのトイレ一箇所だけ——だったのだが、つい先日、風紀委員長室の中にトイレが一つだけ増設された。ゲヘナ全体で胃腸に来るタイプのインフルエンザが流行して、ヒナ委員長も感染してしまったのがきっかけ。あの部屋で執務にあっているヒナ委員長が、急にトイレに行きたくなったときに待つことなく、そして最速でトイレに行けるように、というあくまで効率化の狙

いの元で設置されたトイレだった。

（それに時間が掛かってにおいも、となると恥ずかしいですものね）それはつまり、そのトイレはヒナ委員長の専用トイレだということでもある。チナツが仮に使わせてもらったとして、次に使うとすればやはりヒナということになる。もちろんチナツが残したにおいのことをヒナが気にするとも思えないのだが、それとチナツが恥ずかしくないかという問題はやはり別のものだった。

（結構、我慢するのが辛くなってきました。急ぎましょう）

風紀委員会本部の外に出て、第一校舎を目指す。徒歩三分ほどの道のりを少し急ぎ足で抜けて、先に目的地であるゲヘナの事務室に顔を出す。担当者に書類を預けてから、チナツはそのまま一階にある女子トイレに寄っていくことにした。

……のだが。

（全部、埋まっていますね……お昼ご飯の後だからでしょうか。なんだか、トイレの中が少し臭う気もしてきます）

プブツ、プビビビッ——ニョルルルドボンッ！

トイレの扉を開けて中に入った瞬間、鼻にツンとくるような刺激臭をチナツは感じた。トイレにある五つの個室は全て使用中となっており、時折柔らかない、あるいは水っぽいうるで出ているであろう音がする。昼食時間の後という事情を考えればトイレが埋まっているのはさほどおかしくないが、気になるのはお腹を壊していそうな生徒の割合だった。

極めつけに、空くのを待っている女子生徒が二人。どちらもお腹を押さえ足踏みをしながら空き待ちをしているのを見るに、こちらもお



腹が痛いのだろう。

これでも以前は救急医学部に所属していたチナツとしては、せめて事情を聞いて何かしらの対処をしてあげるくらいのことをしてあげたいところだった。実際、一瞬だけがチナツは大丈夫かどうか尋ねようとしたのだ。

ゴポポポポポツ……ギョルルウー……!!

(うっ……ダメですね、その前に、自分の方をなんとかしないと)

このトイレで空くのを待つのを諦めて、チナツはトイレから出る。他の校舎に行っても良かったが、お腹の具合がどんどん悪化しているのを感じ取ったチナツは、目の前にある大階段を上って二階に上がることにした。

一階に事務室や大きな教室と言った重要な部屋が多いのに比べれば、二階にあるのは基本的に小規模な教室や講堂という、用のある生徒がいくら少ないような場所ばかりである。こちらのトイレであれば一階よりも混んでいないかもしれない——その読みは見事に当たり、二階の女子トイレにはまだ空いている個室があった。

とはいえ、残りはわずか一つ。すでに四つの個室には先客が入っており、そして今チナツが最後の一つに鍵を掛けたことよって、こちらのトイレも全て使用中になった。

(何かが、変な気がします……が、とにかく今は自分のお腹が先です。これ以上待っていたら、漏らしてしまいそうです)

スカートの中に手を入れて、まずは赤色のカラータイツを下ろす。次に白色のショーツを膝下まで下ろしてから、スカートを脇に抱えてチナツはゆっくりと腰掛けた。

ぶうっ。ブビビ、ミチミチチチチチ……どぼんっ。

慎重にお尻の穴を開いて、お腹に力を掛けていく。忙しくて今日の午前中に出せなかった大便が最初にひり出されて、便器の中にはまず、一本のバナナ状の大便が産み落とされた。

(ふう……まあ、お腹が痛かった原因はこれではないですよ)

ギョリリリリリリッ、ゴロゴロゴログウツ……!

そのままチナツは更に上体を前へと倒し、お腹をかばうような体勢へと移行する。左手をお腹に当てて気休めに温めながら、チナツは腹痛の波に耐えるようにぎゅっと目をつぶった。

ビチチチチチチ……ブジュ、ブビビィィー……!

「ふっ……んっ、くっ。……ううっ!」

ブビビビブポツ! ブツ、ブビユウウウウツ。

トイレの全体に大きく響くような音を出してしまい、そして僅かに遅れて自分の股の下から強烈は腐卵臭が漂ってきて、チナツは微かに顔を赤らめた。と同時にチナツは、この猛烈な便意をなんとかこの第一校舎のトイレまで我慢した自分の判断が正解だったと悟った——こんな激しい下痢をヒナ委員長専用のトイレでしてしまえば、恥ずかしさで消えてしまいたくならそうだったからだ。

ブチュツ。ブチュルルル、ブウウウウウ……ツ。

(はあ、はあ……いったん、出し切れたでしょうか……まだ、便意も腹痛も消えるどころではないですが、ひとまず落ち着きました……) 顔を赤くしながらもチナツはもう一度大きく踏ん張り、それからやっとなを上げることができた。猛烈な腹痛に苛まれ、便意と死闘を繰り返していたチナツの額には、うっすらと汗も垂れてきている。

その汗を腕で拭いながら、チナツは小さくため息をつき……そしてふと、自分の体の左右にある個室同士の仕切りの上から聞こえてくる音を耳にしまった。個室が五つ横並びになっているこのトイレでは、左右から別の誰かの排泄音が聞こえてくることがある。

「んっ……ふうっ！ んああああ……ううっ、んく」

ブウウウウウッ、ブジュウウウウビチビチビチ！

「ふう、んうううう……っ！ お腹痛いなあ……うっ！」

ブウウウッ！ ビチッ……ピチピチブウーッ！

様子がおかしい、というのがチナツの第一感だった。自分がお腹を壊しているのが理由不明なのもあるが、その左右の利用者もお腹を壊して下痢をしている。先ほど一階のトイレに寄った際も、個室の中で数名、そして個室の外で二名、少なくとも四名はお腹を壊していたはずだ。この二階のトイレまで合わせれば、七名以上はお腹を壊している……これを単に昼食後だから、という言葉だけで片付けて良いものだろうか？

そして今、チナツの観測できる範囲内だけでも、その腹痛を訴えている女子生徒の人数は更に多いということが判明する。

「あ、あの！ どなたか代わってもらえませんか！ お腹が痛くて、もう……！」

「私もなんです、大きい方が我慢できなくて……お願いっ！」

「あんたもお腹痛いの!? 私もお腹痛い……」

「嘘でしょ……？」

「そんな、ちょっと」

全部個室が埋まってしまったのだから、このトイレに空き待ちの列ができていて、自体はチナツも想定できていたことだった。その先頭が、腹痛に耐えかねて個室の中に向かって声を上げる——これによって、もう一人腹痛に苦しむ生徒がいたことが判明した。

問題はその後……それに続いてもう一人が声を上げ、更に続くように何人もの生徒達が、連続して同じようなことを訴え始めたのである。個室の外の列にはいつの間にか数人が並んでおり、その全員が同じように腹痛を我慢していることが判明した結果、すでにその行列は軽いパニックに陥りかけていた。

そして混乱していたのは、チナツの頭の中もまた同様である。

（え……？ ちょっと待ってください、聞こえてきた感じだと、少なくとも五人……いえ、もう少しはいるかもしれません。しかも全員が下痢を……いや、個室が誰も入れ替わっていないということは、私含めてトイレの中にも五人……）

この空間の中だけで、十人以上の女子生徒が下痢に苦しみ、あるいは我慢を強いられながら並んでいる。もう、どう考えても時間帯の問題や偶然だけで片付けられるようなものではないのは明らかだった。

こんな状況になれば、冷静に状況を報告して場の沈静化を図るのが風紀委員としての役割である。できることならば、チナツは個室を出て先頭に明け渡し、收拾を図る、すなわち救護と誘導に当たることで仕事を全うしたかった。

——それが、できることならば。

ゴポポポポポッ……ブジュルルルブチチチブウッ!

(……ッ! トイレを出るところの状況ではないですね……このお腹の具合では、トイレから出るのもままならないでしょう……だったら、せめて)

自分もはや、率先して事態の收拾に当たすることはできない。だとしたら組織に属する一員として、取るべき行動は唯一つ、上官への報告だった。

《ヒナ委員長へ。お疲れ様です。》

《現在第一校舎のトイレにいるのですが、私を含めて腹痛を訴えている生徒が大量にいます。食中毒など、何かしらの事件が起きているかもしれないので、確認をしてから対処をお願いします》

モモトークのチャットを使ってヒナにメッセージを送ると、幸いにもヒナからは返事がすぐに返ってきた。

《了解。救急医学部にも連絡しておく》

《チナツは大丈夫なの?》

《ありがとうございます。私はなんとかトイレに入れたので一旦は大丈夫です。いつ落ち着くか分かりませんが》

《とにかく体を大事にして。こちらの仕事は落ち着いたら戻ってきてくれればいい》

ヒナからそう伝えられたのを見て、チナツはスマートフォン画面をオフにする。カバンの中にスマートフォンをしまうと、チナツは空いた両手で下腹部をかばうように押さえつけた。そして体を倒して、また排泄の体勢へと移る。

ビチチチチチ……ブビッ、ブジュルルルウッ!

スマホを使っている間少し排泄への意識が薄まっていたことで、直肠にはいつの間にか再び大量の下痢便がリロードされていた。お腹が激しく鳴る音とともに痛みが走ったチナツは、またお腹に力を込めた。ブツビィィィィィッ! ドポポポポポポ……ッ!

第二波の激しい排泄が始まる。最初のものにも引けを取らない勢いとお腹を放つそれは、またすぐには収まってくれそうにない。しばらくは猛烈な腹痛に耐えながら、ひたすらお腹の中身を絞り出す時間が続くだろう。

「お願いです、誰か……誰か、トイレ代わって……漏れる……っ!」  
扉越しに聞こえる悲痛な叫びに罪悪感を覚えながら、チナツは茶色に汚れたお尻の穴を一心不乱に開き続けた。



チナツがヒナに連絡を入れる、ほんの少しだけ前のこと。

第一校舎へ書類の届け物——もといトイレへと向かったチナツを見送った三人は、しばらくの間仕事を続けていた。ヒナがペンを走らせる音、アコがキーボードを叩く音、イオリが書類をめくる音が部屋の中に響き続けている。

ただ、規則的なその音に紛れている不規則で鈍い音があることに、ヒナは気づいていた。

ゴロロロロッ……ギュルッ。グウウウウウッ!

(お腹、いたい……トイレ行きたいかも)

ヒナは気がついていて、というよりもヒナの下腹部から鳴り響いて

いる音こそが、この風紀委員長室に響いている第四の音だった。そしてヒナのいる委員長用の机から少し離れた場所で作業をしているアコもイオリも、ヒナのお腹から鳴っているその小さな音には、気づくことはできない。

本人であるヒナだけが、その音のことを知っている。紺色の万年筆を机の上にそっと置いて、その右手をそのまま下腹部へと滑らせた。急激な下痢であることを示す、ギョルギョルという筋肉が縮むような振動が、手に伝わってくる。

(この感じ、お腹壊しちゃった……下痢してる、かも。しばらく前のインフルエンザに罹っちゃったときみたいな、下し方……早くトイレに行かないと、漏らしちゃう)

急激なお腹の下り方には、ヒナも身に覚えがあった。遡ること二週間前、ゲヘナ学園全体で流行したインフルエンザにヒナも感染し、その主な症状の一つである下痢を発症したヒナは、何度も何度もトイレに通うことになったのである。特に昼食後の便意は突然の出来事であり、すでに列のできていた女子トイレに並んだヒナは、厳しい我慢とギリギリの戦いを強いられた。

あの時の教訓を生かすのであれば、何はともかく早めにトイレに向かつておくのが一番。幸いなことにあの一件を生かし、ヒナは風紀委員長室の中にわざわざ自分たちが使うことのできるトイレを用意してある。風紀委員会本部の建物のトイレは工事中になっているが、このトイレだけは使うことができる——ヒナが取るべき行動は、もう明らかだった。

(二人の前で言いだすのは少し恥ずかしいけど……でも、これ以上は我慢できない)

「ごめん、ちょっとお手洗いにいるわね。……少し長くなるかもしれないけど、気にしないでちょうだい」

「……うん」「……は、はい」

顔色を少し悪くしながらトイレへと向かっていくヒナを見て、イオリは一瞬だけヒナの方を見てからすぐにて元の資料へと視線を戻し、アコの方は驚きと庇護欲と憐情の合わさったような表情を数秒間浮かべてから、やがてゆっくりとパソコンの方を向き直った。

風気委員室の中でも明らかに新しく作られたと分かる茶色の扉を開けて、ヒナはトイレの中に入る。基本的にヒナだけが使用し、外の共用のトイレが壊れた後もアコ達三人の併せて四人しか利用者のいなかったトイレは、ほとんど汚れない。

扉に鍵を掛けてから短いスカートの中に手を入れ、ヒナはまず白色の下着を左足、続いて右足の順に外した。わざわざ用意させた小さな荷物置きの上にその下着を置いてから、ヒナは改めてスカートを上にまくり上げ、新しい洋式便器に腰掛ける。

(んっ……あんまり、音は立てたくない……)

ブジュルルルルッ。……ブピッ。ピチィ……ッ!

大きな音を立ててしまわないように、ヒナは慎重にお尻の穴を開く。小ぶりな臀部の中央にある尻穴がゆっくりと大きく膨らみ、その中央から露出してきた直腸は、しかし外に出るなりいきなり大きな音とともにその中身を便器の中へとぶちまけていく。

(……ッ！　お願い、アコとイオリには聞こえていませんように……。生理現象なんだから仕方ないかもしれないけど、それでも……。ああ、出る……。)

プビビビビジュルルルビチビチビチ……。ブポッ！

個室がいくつもあるようなトイレに比べれば、扉の上下に隙間がない分だけ外に音は漏れて行きにくいだろう。作業の部屋から直結している場所に作らせたトイレなので、できるだけ防音には気を配って施工してもらったつもりだ。

けれどもどれだけ音漏れに配慮して設計されていたとしても、扉一枚だけで防々ことのできる音に限界があるのもヒナは十分理解している。この数日の間に、アコやイオリがトイレを使った際の放尿音がデスクにも微かに聞こえてきて、ほんのりと顔を赤らめたこともあるくらいだった。

ドボドボドボッ、プビビッ！　ビチチチ……。プッ、プッ！

直腸の下の方に溜まっていた液状便をある程度出し切ったのか、音が次第にガス混じりのものに変化していく。軽くお腹に力を入れただけでも多くの量が噴出し、腸内の圧力が一気に下がるようになるのが、ガスの多い排便をするときの特徴だった。しかし逆に言えば、腹圧を下げ便意から解放されるかわりに、その代償としての排泄音が大きくなる。

プウウウウッ！　ビチビチビチプウー……ッ！！

(音が、すごい……。抑えたいけど、お腹が痛くてそれどころじゃ……。お願い、早く終わってほしい……。)

早くこの時間が終わってほしい。それはヒナの切実な願いだった。

けれども実際は、ヒナの願いとは真逆のことが起こりつつある。ヒナの下腹部の痛みとギユルギユルという蠕動運動に伴う揺れは相変わらず体の芯を伝わって感じられており、液状の便がまだ大腸を伝って降りてきているのが理解できた。

少しガスを出して落ち着いたように感じられたのも束の間、第二波の排泄が始まる。

プウッ……。ベチヨベチヨベチヨビチチチチチプババッ！

「んっ……。はあ、ふうううっ……。！　うーん、いたい……。ッ！」

やや薄手の服の上に左手を当てて、お腹をさする。温めて楽にならないとは分かっているけど、そうせずにはいられなかった。

だが、その排泄音の向こう側——扉一枚隔てた風紀委員長室の本来の空間から、突然切羽詰まった同僚の音が聞こえてくる。

「あ、あの……。ヒナ委員長！」

「……。ッ!?　な、なに……。時間掛かるって、いったよね……」

驚きを前にヒナは体をビクッとこわばらせてから、顔を上げて扉の方に向き直る。いつものようにオーラを出すことはできないが、ヒナはこれでも、トイレの最中に声を掛けられた恥ずかしさを声に込めたつもりだった。

だがその怒りも、腹痛に苦しんでいる行政官には届きようもない。

「分かっています……。分かっていますけど、少し急いでほしいんです！　お腹が急に痛くなってきた、もう我慢が……。ヒナ委員長が大きい方をしているのは分かっていたんですが、それでも……！」

これほどまでに焦ったアコの声を聞いたのはいつぶりだろう、とヒナは思った。感情的になってしまうことはあれど、冷静に物事へ対処

することの多い行政官という立場上、アコが感情を露わにして焦り散らかすのはあまり日常的なことではない。

そして、その奥から。

「……ちょっと待って、アコちゃんもお腹痛いの？ 私もお腹痛くて委員長が出てきたら、って思ってたのに……嘘でしょ……」

「待ってください、その言い方はイオリもお腹が……。わ、私が先ですからね！」

「そんなことは分かっている！ ……でもお願い、急いで……」

ゴポポポポポポツ……キュウウウウウツツ！

自分のお腹の音ではない別の音が、扉の向こう側から聞こえてくる。アコがトイレの前まで来ていて、そこで我慢しながらヒナが出てくるのを待っているのが、状況の見えないヒナにも理解できた。

すぐに出てあげなければ。今すぐに出てあげないと、アコはともかくその後ろに並んでいるイオリが間に合うかどうかは分からない。二人のためにも、ヒナは今すぐにトイレをアコに譲ろうと立ち上がりかけた。

しかしその瞬間、お腹に圧力が掛かった結果は、ヒナの望むものは真逆のものだった。

ブウウツツ！ ブリュブリュブリュビビビビビツツ！

「うっ……お願い、止まって……がはああつ！ ふう……ツッ！」

扉から離れていれば、アコやイオリにもあまり届かなかったその破裂音も、今や扉の目の前にいる二人には、もう十分すぎるほどの音量とともに届けられる。アコの顔が、より一層真っ青になっていくのがイオリの目に入っていた。

「ひ、ヒナ委員長……まさかヒナ委員長も、お腹が……」

「うん……。ごめんアコ、それにイオリも、もう少しだけ、待って……辛いのに、本当にごめん」

少し悩んだ末に、ヒナは扉の外の二人に対して謝る選択をした。どう考えてもこのお腹の具合では、今すぐにこのトイレを出るということはできそうにない。アコの苦しそうな表情も、イオリの泣きそうな顔も容易に想像ができたが、それでも今のヒナは、二人に負担を強いる選択肢しか選べそうになかった。

「ふんっ……んっ！ ふうっ、はあ……んっ……ッ！」

水気たっぷりの、けれども軽い高音がトイレの中に響く。息んでいる声の大きさは対照的に、お尻の穴から奏でられるビチビチという音は断続的で、そして弱い。出せるものがある程度出し切ったヒナが苦しんでいるのは、便秘そのものよりもむしろ、お腹に残ってしまった妙な痛みとしぶり腹の方だった。トイレの外でアコ達が我慢しているものの量に比べれば、その量は微々たるもの。けれども無視して下着を履き上げるには、あまりに多すぎる量の大便が、途切れ途切れにお尻からあふれていた。

でも、いつまでもそうしているわけにはいかない。

「んっ、んっ……んううっ。……ふうっ！」

……ドボドボドボツツ！ ブリリリリリビィィィィィッッ！

少し大きめの破裂音とともに、僅かに便意がおさまる。まだトイレを出たくはない、本当であればもっとゆっくりトイレに籠もりたいお腹の渋りが、下腹部全体に残っている……けれどそれを無視して、ヒナはウォシュレットのボタンを押した。

## 第三話 ゲヘナ学園自治区郊外

場所を少し移して、ゲヘナ学園の公害にある雑居ビルの一フロア。一見すれば何もないように見えるこの古い雑居ビルの三階も、扉を開けた先にはアウトローな空間が広がっている。看板も出していないこのフロアを拠点に活動し、温泉開発部と並んでゲヘナ学園で最も危険な存在として認識されているこの部活動こそが、便利屋六八——そして部屋の中央にあるアルミ製のテーブルを囲み、三人の部下の顔を順番に見てから神妙な面持ちで口を開いたこの女子生徒が、部長、もとい社長の陸八魔アルであった。

「みんな、今日は——食費が一日百円で済んだわよ！ これはいい節約になったのではないかしら！ これの生活なら食費が四人合わせでも一ヶ月一万二千円で済むわ！」

「ア、アル様……天才です……！」

「……えーと、アルちゃん？」

「カレー百円なのは今日だけって書いてあったよ。あと、私は一ヶ月毎日カレーライスだけは嫌なだけで！」

「な、なんでですってえー!？」

カヨコから指摘を受けて、あるが慌ててスマートフォンでSNSを開き給食部のチラシを確かめる。その経緯を考えれば至極当然のことだが、しっかりと「数量限定」の文言の隣には「本日限定」とも記載があった。

「私の食費節約計画が……これではしばらくは仕事がなくても食べていけると思ったのに……！」

「……これで生きていこうとするのはちょっと無理じゃないかな」  
 ダメ押しの手突き込みがカヨコから入り、アルはショックを受けた様子でソファに座り込んだ。そこそ本気で、百円のカレーライスで食いつなぐ予定だったようである。

何を隠そう、今朝ゲヘナの食堂に集まった生徒の中で、あのカレーを食べることに最も命を燃やしていたのがこの便利屋の面々、特にアルであった。百円でカレーが食べられると聞きつけ、中でもアルは久しぶりにまともな固形物が食べられるチャンスとして、開店の一時間以上前から並び、彼女たちは先頭で食堂に入ったのである。

救世主的存在だったカレーが一度だけの存在だったと知り、ひとりきりショックを受けたアルはようやく顔を上げ、今度はいつの間にか周りにいるのがカヨコだけになっていることに気が付いた。

「……あれ？ カヨコ以外は？ ハルカとムツキはどうしたのよ？」

「ハルカはビルの裏に置いてある雑草の植木鉢に水をやりに行ったよ。ムツキは知らないけど……多分トイレじゃないかな」

「そう……！」

またしよんぼりした様子を見せるアルを見て小さく息を吐いてから、カヨコも自分の机に戻っていった。



さて、何も言わずに部屋から消えていったムツキは、やはりカヨコの予想通りトイレへと足を運んでいた。スタスタとした足取りでフロアの端っこにあると入れへとやってきて、少し雑に扉を閉めて鍵を掛

けるのも、普段通りのムツキだ。

ただ、普段のムツキと違う点があるとすれば……それは表情とか顔色とか、そういった部分になってくるのだろうか。

きゆるるるるる、ごろごろ。グルルル……ッ。

(変なの、こんな時間にお腹痛くなってくるなんて。あ、でも久しぶりにちゃんとしたご飯食べたから、お腹がおかしくなったのかな)

グルグルという鈍い音がトイレの中に響いて、ムツキが微かに顔をしかめる。先ほどまでのような、何か企みを含むような怪しい笑顔はとうに消え、お腹の痛みを気にしながらスカートの中に手を伸ばす彼女の姿はもう、単なる一人の女子学生の姿それだけだった。

古い雑居ビルのトイレという場所が災いして、便利屋のオフィスフロアにあると入れは残念なことに古びた和式トイレ一つだけである。現代人たる彼女たちにとって、ウォシュレットどころか洋式便器ではないこのトイレだけは、どうしても残念と思わないところがないわけではない。

(アルちゃんも、もう少し新しい建物にオフィスを作れば良いのに。……まあ、そんなお金ないだろうけど)

薄い黄色という少し珍しい炬の下着を脱ぎ、ムツキは左足から飲みその下着を外す。右の膝辺りにその下着を引っかけたままムツキは小さな段差を上り、和式便器をまたいでしゃがみ込んだ。

しゃがみきつた瞬間から、すでにムツキの肛門は小さく震え続けている。ムツキは一度後ろを振り返り、僅かに足を前に進めてから、ゆっくりと息を吐いてお尻の穴に力を入れた。

「んっ。んっ……ふんっ………。んっ」

ぶぶぶぶぶつ、にちちちちち……ポチャ、ブウッ。

朝五時の起床から始まった午前中の生活がイレギュラーすぎて、ムツキは今日の朝食後にトイレへと行かなかったことを今になってようやく思い出した。出口で蓋をしてくれていた一本の大便の塊をゆっくりと便器の中に産み落として、二つ折りになったそれが和式便器の後方に溜まる。

ひり出されていく勢いが徐々に加速していくにつれて、便の質が急激に柔らかいものへと変化していった。形を持って白い便器の中に溜まっていたそれが、いつしか形の崩れがちな軟便となり、便器の中でもソースのように形のある便の上に振りかけられていく。

「んっっつ、ふうんっ……ぐうう……。はあ、いたた……」

ブジュルルルルッ、ピチピチピチブブブッ!

子供のように片目をつぶってお腹をさすると、ムツキはすぐにまたお尻の穴を開き始める。自分の意思と言うよりも、体が勝手に息んでお腹の中のものを外に出そうとしているという方が近かった。

お尻の穴から飛び出していくものは、気が付けば完全に軟便となり、その水分量の多さは下痢便に近いものすら変わりつつある。ただの緩い便意だとばかり思っていたそれは、もう下痢からくる便意以外の何物でもない。

(これ、完全にお腹壊しちゃってるじゃん。なんでだろ、やっぱりちゃんとしたご飯だったからお腹がダメになっちゃったのかな。……うう、お腹痛い)

「んーっ、うーん……。んっ! んうう……」

ムツキのあまり出してこなかった部分……少し子供らしい感情が、



声となって現れる。何かを考えることもしないシンプルな「お腹が痛い」という感情と、小さくて途切れ途切れの息み声は、ムツキの幼い部分でもあった。

一方でその身体から出されてくるものは、別に他の年代の女子と大差があるわけではない。便器にまたがった小ぶりなお尻であっても、壊れた水道のように出てくる水気たつぷりの下痢便は、今別のトイレで苦しんでいる多数のゲヘナ学園の女子生徒と変わらない。

……もつともそのことをムツキや他の便利屋のメンバーが知ることになるのは、ずっと後になってからのことなのだ。

ピチピチピチ……チュオッ！ ブウウウウウッ！  
（ちよつと治まったかな。それにしても久しぶりだね、こんなに  
お腹壊したの）

第一波として催していたものもある程度出し切り、ムツキは少し下を向いて便器方へと意識を向ける。便器の後ろ中央には一本の大便があり、そしてその上と周りには軟便が、便器全体には茶色い水が広がっている。自分の便質の三段階の変化を見せられているようで、ムツキは恥ずかしさに近いものを覚えた。

（ちよつとクサイし、一度流しても……って、それはダメなんだっけ。  
アルちゃんが水道代を節約して、って言ってたもんね）

目の前にあるタンクのレバーに手を伸ばそうとして、ムツキは手を引く。学校の校舎や公衆のトイレであればムツキも大便をするときには水を流しながら済ませるが、この便利屋オフィスではそうもいかない。トイレの水道代を節約するためにも、水を流すのはトイレを出るときの一階だけにしなければならぬのだ。

それでもムツキがこれでトイレを出るのであれば、水を流すことに問題は無い。でも残念ながらムツキはまだ、便器から腰を上げることができそうな状態ではなかった。

ブジュッ、ブビビビ。……ピュウ——ピチチチ！

しゃがんでいるだけでも勝手にお尻の穴が小さく開いて、水っぽい下痢便がその小さな隙間を通って便器の中に注がれていく。残便感——と呼ぶには強すぎるお腹の痛みと下腹部にすくう質量缶が、ムツキをずっと便器の上に縛り続けていた。

ムツキ自身もお腹の痛みから解放されるべく、小さな右手ですっとお腹をさすり続けていた。お尻をできるだけ地面に近づけ、体全体を使ってお腹の中に残っている下痢便を必死に出し切ろうとしている。痛む箇所もお腹全体から下腹部に移動してきているのか、右手で抑えているのはスカートのベルトのすぐ下辺りだった。

ブビビビビッ、ピチチチ……ピチッ……ブババッ！

息むことで、水気の混じったガスが小規模に出続けている。いつまでも続くように思っていた腹痛だったが、二分くらいひたすら唸っていたおかげだろうか、突然ムツキの大腸は再び激しく蠕動運動を開始したかと思うと、その中身を一気に直腸の中へと送り込んだ。

ゴポポポポポギョルギョルギョルグウウウッ！

「来た……ッ！ う~~~~んっ、ふうううう……んっ！」

膨らんでいた直腸がその濁流を受け止めて、やがてその重さに耐えきれなくなつた肛門括約筋が肛門までの道のりを開く。体の奥底から湧き上がってきたかのようなドロドロの下痢便は熱く、肛門に直腸が達すると同時にムツキは再び激しい便意を感じた。

笑顔などどつくの昔に消え失せ、彼女はひたすら顔をゆがめて、下腹部に力を込める。

プウウウウツッ！ ピチチチチベチヨベチヨベチヨ！

「んー、ふんっ、はあ……んっ、んっ……っ！」

噴火の勢いは中々衰えない。すでに周りが茶色に染まりきった肛門から、泥水のように水ばかりの大便が勢いよく噴き出していく。ガスも大量に混ざっているようで、音が凄まじいだけではなく、和式便器の白い壁にたくさんの茶色い斑点を作っていた。

けれども大量の下痢便を一気に出すことができた効果は大きかったようで、ムツキの腹痛も急激に和らいでいく。ガスを出せたことで腹圧も落ちてきたのか、ひたすら三回に分けて下痢便を出し終える頃には、ムツキの顔にもほんのりと赤みが戻ってきていた。

びちちち、おびびびっ。……ふうううっ。

（終わったあー。にしてもこんなにお腹壊すなんて……変なものでも食べちゃったかな。それともまさか、カレーが……辛かったから？）  
そんなことを考えつつ、ムツキは姿勢が辛くなってきたのかゆつくりと腰を上げた。そしてトイレトペーパーに手を伸ばして、ゆつくりとお尻の穴を拭う。

一回目はぬるっという感触とともに、トイレトペーパーがお尻の穴の上を滑っていき、たちまち使い物にならなくなってしまう。二回目にお尻へと当てた紙がようやくまともに汚れを吸い始めたところ……ムツキの真後ろで突然、金属音が鳴り響いたのである。

「ムツキ、遅いわね」

「……そういえばそうかもね。なに、アルもトイレ行きたいの？」

「そ、そういうわけじゃないわよ？ ただムツキが戻ってこないから心配しただけで、別に私がトイレに行きたいからムツキが出てくるのを待っているわけじゃ」

ゴロロロロロ……ギルギルギルギルギルツ！！

「……別に隠さなくても良いのに。トイレ行くのくらい恥ずかしいことじゃないんだから」

「そ……そうね。でもムツキが出て行って、そろそろ一〇分くらい経つかしら……」

「それくらいかな。……もしかしたら、もうトイレから出てどっか行っちゃってるかもよ」

「えっ？ でもムツキなら確かにあり得ない話じゃないわね……ちよつと行ってみようかしら」

そう言つて、アルは自分のデスクから立って扉の方へと向かう。入り口の扉のすぐ脇にあるキッチンのエリアに入って、ドアノブに手を掛ける。

てつきりムツキがもうすでにトイレを出てどこかに消えているものだと思ひ込んでいたアルは、押し込んだドアノブが全く動かないことに焦ったようだった。

「……っ!? なんて……!?!」

「あれ、アルちゃん？ ごめん、私入ってるよー」

「ムツキまだ使ってたの!? そ、そうだったのね……!」

ドア越しに聞こえてくる、少し焦りを含んだアルの声。その声を聞



いてムツキは思うところがあつたのか、お尻を拭い終えてトイレレットペーパーを便器の中に捨てると、おもむろに立ち上がりながら、少しにやつとした表情を浮かべた。

「アルちゃん、やけに焦ってるけど……もしかしてお腹痛いのー？ それもかなり漏れそうなんじゃない？」

「そそ、そういうわけじゃ……！ でもムツキ、トイレは終わったから早く出てきなさい」

「えー？ でも私もお腹痛いからあー、もうちょっとかかるとかかると、アルちゃんいい？」

「ムツキも……？ そ、そういうことならし、仕方ないわね。私はここで待っているから……」

ごろごろ、ぎゅうううう……グルグルグルルッ！

ムツキの言い分を信じ込んだアルは、覚悟を決めたようにお腹に手を当ててドアノブから手を離れた。「お腹が痛い」と言っている部下たるムツキの言い分を受け入れたアルは、ムツキのことを急かさずじつと待つ洗濯をする。

ドアの向こう側からの声が止み、むしろ意外そうな顔をしたのはムツキの方だった。拍子抜けしたような表情を浮かべつつ、ムツキは小さくほっとため息をつく。

（この状況で信じ込まなくても良いと思うんだけどな。ま、これがアルちゃんらしいってことで）

「アルちゃん、もう終わったからそろそろ代わるところだよ。あとちょっと我慢できるの？」

「ほ、本当に出てきてくれるの？ 大丈夫よ、お腹痛いけどもう少し

なら……」

感情をぐちゃぐちゃにされて正直にお腹の具合を話してしまうアルの声を背中に聞きながら、ムツキは再度トイレレットペーパーに手を伸ばした。何度もお尻を拭って、ようやく汚れの付かなくなった紙を便器の中に捨ててから、下着を穿き直す。

泥水のなかに一本の大便の浮かんでいる便器の中身を全て下水道へと追いやつてから、ムツキは段差を降りて鍵を開け、ドアをそっと開いた。

そこにいたのは、やはり声の主だったアル——本当に限界を迎えていそうな汗だくの表情をして、腰を折り曲げてお腹をずつとさすりながら、必死にムツキが出てくるのを待っているアルが、ムツキの姿を見て顔をほころばせているところだった。部屋を出たのはわずか二分ほど前だったのだが、それから今までの間に、お腹は相当下りだしたらしい。

「あ、アルちゃん……だいじょうぶ？」

「ええ、これくらい平気よ……それじゃムツキ、またあとでね」

心配を掛けまいとして平静を装いたいものの隠し切れない、そんなアルがトイレの中に消えていくのを見守ってから、ムツキは外にある水道で手を洗うと、オフィスの中へと戻っていく。

一方、トイレの中によく入ったアルは、トイレの中に充満する酸っぱいにおいに顔をしかめつつも、便器をまたいでスカートの中に手を伸ばしたところだった。少し濃いめのピンク色の下着を勢いよく膝まで下ろして、それからすぐにしゃがみ込む。隠そうとしていた便意を何より雄弁に物語っていたのは、外気に触れた瞬間にいいよ細

かく震え始めた彼女の肛門だった。

(この臭さ……ムツキ、本当にお腹痛かったみたいね。私も、ただ……ん〜っ)

そのときに現在進行形でお腹を下していたかは別問題として、このトイレの中にはムツキがお腹を壊していた証拠とも言える残り物があちこちにある。それはトイレの中の空気でもあり、アルが排泄を始める前から存在していた便器の中の茶色い飛沫であった。

ブジュルルルルルルッ、ブビビビビビビビビビビチ!

アルが顔をしかめてお腹に力を入れるのと同時に、肛門が一気に大きく開く。肛門括約筋に押しとどめられていた直腸が一番下まで達し、その中身を便器の中へとぶちまけていく。

ムツキほど激しくは下していないのか、アルのひり出している軟便や下痢便の方がいくらか粘性を帯びていた。水状というよりも泥状と形容するべき薄茶色の下痢便が、便器の後ろ半分に溜まっていく。

ブボオ、ビチチチィッドブブブブブブブブブブウーッ!!

「んうう……!! ふう……!! はあ、んっ……ん〜っ!!」

左右の壁に手をつけて体を支えながら、アルは息を吸いつつお腹に力を込める。呼吸に合わせて息んでいるアルのお尻の穴は、その呼吸の音に呼応するようなタイミングで閉じては開いてを繰り返し、開く度に肛門で弾ける泥水が、お尻の穴の周辺部と便器の中をどンドン汚していった。

ドボボボポップリユブリユビチビチィィィッ!

(お腹が、苦しいわ……。何なのかしら、いつたい……んうっ! ムツキと私、二人同時にお腹を壊してしまうなんて……もしかして、何

か食べ物が……)

壁から離れた右手でお腹を当てつつ、アルは少しだけ落ち着いてきたお腹をなだめるようにゆつくりとさする。トイレに駆け込んでしゃがみ込んだ瞬間のような勢いは確かに失われ、今は途切れ途切れに下痢便が少量噴出するような時間が続いている。大腸の中でも端の方から送り出されてきているからなのか、時折多少形のある軟便のようなものが出てくるときもあった。

ビチチチ……ムリユムリユムリユブジュウ〜ッ!

(昨日は……朝は四人で食パンを分け合って、昼はカップ麺で……お腹を壊すようなものは見当たらないわね)

トイレに大きな音を響かせるほどの放屁をし、ほんのりと顔を赤めてからアルはこの腹具合の原因について考えていた。昨日の食材に意識が行ってしまうが、朝食の食パン、昼食のカップ麺も腐るような食品ではない。一昨日スーパーで購入した四枚切りの食パンは確かに半額シールが貼られていたが、消費期限は昨日までだったので問題は無いはずだ。

(昨日の夜……は、そういえばコンビニの廃棄弁当だったかしら。でも昨日は三つしかなかったから、私は食べていないはずなのよね)

一番原因としてあり得るのは、数時間ほど消費期限をオーバーしながら食べた廃棄弁当であることに異論はない。けれども残念なことにアルはそれを口にはせず、昨日の夜ご飯は抜きだったので、自身がお腹を下す理由が見当たらないのだ。

だとすれば、いつたい……などと考える暇は、与えられなかった。ガタガタガタガタッ!

「はあ……！ え……？」

「……？ その声、ハルカじゃない？ どうしたの、そんなに焦って」

「……………!? あ、アル様!? い、いえなんでもな……ッ！」

ぐぎゅうう~~~~ごろごろごろごろびい~~~~っ！

「ハルカ……もしかして、お腹が……？」

「は、いつ……。ああでもっ、アル様がトイレを使っているんですから、どうか私のことなど気にせずゆっくりと……！」

ぶびいつ、ぶしゅうう……プリップウウウウッ！

まるで数分前のアル自身の行動を繰り返しているかのような、ドアノブをガチャガチャと何度も捻る音。無情にも全く動かないドアを見てようやく先客の存在に意識が至るといふのもまた、アルが経験した行動と全く同じだった。

言いつだけ聞いていれば、別にハルカは切羽詰まっているわけではなさそうだ。アルがゆっくりトイレを使うのを待つだけの余裕がある——だがそう言っているのは表面上の言葉だけで、もう一つドアの向こうから聞こえてきているのは表面の言葉だけで、もう一つドアの音は、どう考えても限界寸前の我慢を強いられていることを物語っていた。

「正直に言っつて、ハルカ」

「大便が………したいです……。お腹が痛くて、大便が、下痢の大便が漏れそうです……っ！」

「………そこで待っていないさい、ハルカ。もう出るところだったから、すぐ代われるわ」

そう言いながらアルは顔を前向きに起こすと、小さくため息をつい

た。つい先ほどまでお尻の穴から垂れていた下痢便は、いつの間にか肛門がしっかりと閉ざされ、漏れ出てくるガスも含めてピタッと止まっている。そのままアルはお腹から離れた右手でトイレトペーパーを巻き取り、お尻の汚れを拭き取っていく。一度で当然いきれるはずもなく、アルはペーパーをたたみ直してもう一度拭いた。最後にもう一回汚れを拭い直してから、ゆっくりと立ち上がる。

下着に手を掛けて焦りつつも穿き直しながら……アルは一瞬だけ、左目をつぶった。

グギューウウウウッ、ゴロゴロゴロゴロ……。

（っ………まだ、お腹が……うんこも、出そうだけど……。ううん、ハルカが待っているんだから、どんな状況でも社長が部下に我慢を強いるなんて許されないわ）

大腸の奥の方から感じる鈍い痛みに気づかないふりをしながら、アルは水洗レバーに手を伸ばす。便器の中に溜まっていた茶色い液体が流れきるのを確認せずに、アルはトイレのドアを開けた。

ドアを開けた先にハルカが立っているのは、アルも想定していたところだった。だがハルカが顔面蒼白なだけにどまらず、額には大粒の汗を浮かべ、さらには大きな音で鳴動を放ち続けている下腹部をひたすらさすっている——そんな普段のハルカとはかけ離れた様子で待っているとは、アルも全く想像していなかった。

「ちよつと、ハルカ!? だ、大丈夫なの？」

「はい、まだ、漏らしては、いませんから……」

「とにかくトイレ出てきたから、使っつて良いわよ。早く」

「うう、アル様……ッ！ ありがとうございます、すみませんすみま

せんすみません……」

ひたすら「すみません」と呟きながら、ハルカはトイレの中へと駆け込んでいく。アルがその姿を振り返ってみれば、右手でお腹をさすっていただけではなく左手はお尻を握るような力で押さえつけているところだった。

トイレの中に入ったハルカは、お腹から右手を離すと、ガクガクと震えるその手で必死に鍵を掛ける。お尻を開かないよう、懸命に力を込めて肛門を締め上げながら右足、左足の順に段差を上っていく。便器をまたぐといよいよ膝は制御が効かないほど震え、下着を下ろそうとする右手にも力が入らなくなっていた。

それでもハルカは、震える右手で白のショーツを下へ下へとずらしていく。思っていたよりも、排泄の準備を整えるための時間が必要だった。

ぶぶつ、ぶりいっつ……ブツ、ブウーッ、ブリリリリ！

熱いものが更に腸を下ってきて、すでに膨らんでいる直腸に重くのしかかる。溜まっていた熱いガスが漏れ出し、ハルカは震えるお尻を丸出しにして突き出しながら、その気体が溢れ、漏れていくのを止めることができなかった。

ハルカの顔が、青ざめていく——お尻の穴のすぐそばを熱いものが通り抜けていったときは、ハルカも粗相をしてしまったかと思ひ込んだほどだった。だが数秒の時間が経ち、肛門の周りに止まっていた熱いものは風邪の流れに乗って霧散していく。そこまできてやっと、ハルカはまだ最悪の事態には陥っていないことを悟った。

(助かった……。また、うんち漏らして、ない……)

ゆっくりと、慎重に腰を下げていく。これ以上お尻の穴を開いてしまわないように全力で肛門括約筋に力を込め続けながら、ハルカはやっと和式便器をきちんとまたぎ、しゃがみ込むことができた。

震える肛門が突如隆起して、肛門の外へとせり出してきた直腸から、熱い下痢便が飛び散りながら便器の中へと降り注ぐ。

ブチュブリリリリリリリッ……ブッピーーッ!!

ムツキ、アルに続く三人目の排泄。便器の後ろ側に少しづつ残っている茶色い斑点に、また新しい色合いの汚れが追加された。全開になった排泄孔から壊れた水道のように激しい勢いで噴き出している水様の下痢便は、便器の底に溜まっている僅かな水では衝撃を吸収しきれず、行き場を失った運動エネルギーを手に便器の壁へと飛び散っていた。

お尻の穴が広がって、幅にして二センチを超える滝が肛門から便器に向かって一本貫いている。その激しい排泄にもはや、ハルカ自身の意思が介在する余地はない。

ブチュルルルルルドポドポドポビィィィッ!

お腹に手をつつままれて、大腸を一周回りながら絞られているみたい——下腹部の痛みに耐えるハルカの感覚は、強烈な腹痛と便意のみに支配されている。直腸が空になったように思えたのに、肺の中の空気を出し切って、新しい空気を吸い込む……たったそれだけの間に、また直腸には新しい下痢便が再装填されている。直腸が重くなると感じるのとほぼ同時に、ハルカの肛門は火を噴いた。

ぶぶううっ……ぶび　ピチピチピチビビィィィッ!

壁に手をつくこともせず、ひたすら両手でお腹を温めさすりながら、

一分ほどはひたすらうなっていただろうか。激しい排泄の速度は装填の速度を上回っており、ようやく一度ハルカの肛門は空になったところだった。

荒い呼吸をしながら、ハルカはゆっくりと顔を上げる。……刹那、また下腹部がぎゅうつと痛み、直腸が膨らむ感触が体中を駆け巡る。

ぶうう！ プリブリツ、ブブツ、ブビ……ブビブビ！

また激しい排泄が再開したかと思ったが、ハルカの尻から放たれたのは空砲にすぎなかった。熱いガスがたくさん肛門から放たれて、トイレの中において拡散していく。

（くさい……。まあ、これだけお腹を下しているんですから、仕方ないですよね……）

鼻をつく腐卵臭に顔をしかめながら、排泄の波が僅かに落ち着いてきたことでハルカも表情に余裕が戻ってくる。猛烈な排泄の前に繰り広げられていた我慢という戦いのことを思えば、便器の上にお尻を出していられる今は遙かに幸せだった。

ハルカがお腹の痛みを自覚したのは、僅かに一分ほど前のこと。雑居ビルの裏手にこっそり置いてある植木鉢の様子を見に行き、手入れをしながら雑草に水をあげていたところ、ふと鈍い痛みとともに便意が膨れ上がってきたのだ。

便意を自覚してからお腹が下り始めるまでは、本当にあつという間だった。お腹の不調を意識したハルカが植木鉢から手を離して立ち上がり、じょうろを戻しに行く——わずか一分足らずの間に、ハルカはもうトイレに行きたくて仕方がなくなっていたのだ。便意の波が落ちてくまでその場でお腹をさすり続け、やつと落ち着いたところでお尻

の穴に意識を集中しながら階段を上りきり……たどり着いたはずのと入れに鍵が掛かっているのを理解したハルカの表情は、絶望の具現化と言いきものだった。

何度でも言おう——そんな我慢という戦いに比べれば、今のハルカの戦いはまだ楽なものと言えるはずなのである。

ブビュルルルルルルッ！ ……ブチュブチュブチュッ！

（うう、また……お腹が、痛い……！ 大便が、まだつ、まだまだ出そう……うううっ！）

暴れる気配を見せていたお腹をさすり続けたもののまるで意味はなく、一分少々のインターバルを経て、ハルカの大腸は再び暴走を始め、異常なペースでの蠕動運動によって大量の下痢便を直腸へと送り込んでいた。

痛むお腹を宥めるようにさすりながら、ハルカは腹痛に耐え続ける。どれだけ下痢便を出し続けても、ハルカの期待とは裏腹に下腹部の弱くも鋭い痛みは消えていかない。

「はあ、はあ……っ！ 痛い……はうっ。ぐううっ……！」

びしゃびしゃびしゃっ！ ……ぶびゆるるるるっぶうっ！

水気たっぷりと言うよりも、ほぼ水と形容するのがより正確だろうか。横行結腸から下行結腸、そしてS状結腸を波打ちながら一気に駆け下った下痢便が、バシャバシャと音を立てながら直腸に入り、そしてダイレクトに便器の中へと叩きつけられる。時折大腸の奥側から一緒に送られてくるガスが、その音をより大きくさせ、そして肛門ではじけ飛ぶ下痢便の量を格段に増やした。

（音が、また……。お願いです、早く終わって……。そろそろ、大便も

なくなってきた気が……)

ビチヂチヂ、ブリップブリップウウウウッ!

ただ、大腸の奥から送り込まれてくる下痢便が直腸まで一気に移動できるということは、大腸のなかで暴れ、ハルカの当初の激しい便秘の原因となっていた下痢便のうちほとんどは無事に排泄することができたということでもある。

确实にお腹は軽くなってきた。あと一息で出し切れそうな感覚がして、ハルカは全力でお腹とお尻に力を掛け、思い切り息む。

「んううう……っ! はあ、ふぐうう……んう、ぐうう……!」

ビチビチビチビチブウウウウウウッ!

「はあ、はあ……終わり、ました……!」

大音響でのガスの放出とともにハルカの排泄が終わり、お尻の穴からは出口のところに残った僅かな下痢便がポタポタと便器の中に垂れている。ひとまず、感じていた便秘の元凶となった下痢便は残らず出し切ることができたようだった。

小さくため息をついてから、ハルカはトイレトペーパーでお尻を拭う。一回、二回、三回……ヌルヌルとした下痢便はお尻の穴の周囲の広範囲に広がっていて、中々拭ききれない。やっとお尻をきれいにし終わってから、ハルカは最後に便器の後ろに飛び散らせてしまった汚れを拭き取り、ゆっくりと立ち上がった。下着を履き直して真下を見ると、改めてとんでもない量の下痢便が目に入る。少なくとも便器全体を茶色に染め、後ろ半分に軟便だけで小山を作り上げるほどの量を排泄したのは、初めてかもしれない。

(ひとまず、お腹も落ち着いたら……出ないと。そういえばアル社長

に急いでもらったから、トイレを出たら声を掛けないと……)

レバーを倒して水を流し、トイレの鍵を開ける。

部屋に戻ってアルに声を掛けてお礼を言わなければいけないと思っていたハルカは。

「……え」

扉の目の前に、つい一〇分前の自分自身のようにへっぴり腰になりながら荒い息をしているアルと、その後ろに立っている、顔を真っ青にして汗をかきながら、普段めつたに見せることのない苦悶の表情を浮かべているカヨコの姿に、言葉が出なくなっていた。



カヨコがひとりオフィスのデスクで音楽を聴いていると、部屋の入りに口から響いてきた足音がイヤホン越しに聞こえてくる。カヨコがそちらの方を見ると、部屋に入ってきたのはムツキ——だがその姿は生気を吸われたように元気がないものだった。普段の快活な様子を見ると、およそ想像のつかないほどに痩せて見える表情をしている。

「……ムツキどうしたの。変なものでも食べたの?」

「そうかも……はあ」

「え、ちょっと待って、本当に?」

「うん……すぐお腹壊したから、何か変なの食べたかも……それにアルちゃんもすぐお腹痛そうだったし。私たち食中毒にでもなったのかな」

そう言い残して、ムツキは来客用のソファに横になって、そのま



## 第七話 ゲヘナ学園中央区

衛生状態の良くない食品を口にすれば、食中毒が起こる。その食品を多数の人が同時に喫食すれば、それは集団食中毒となる。美食を愛するものならば、それくらいの知識は持ち合わせているのが当然というものだ。

部活棟の三階、二階のみならず一階のトイレまでもが満室、しかも先客の全員がお腹を壊しているという異常事態を見て、黒館ハルナは早々にその可能性に行き着いていた。三階と二階のトイレではそれでもまだ順番待ちの生徒が発生するには至っていなかったものの、いざ二階から一階にフロアを降りてみれば、そこにはもう集団食中毒を思わせる兆候のようなもの……埋まった二つの個室に加えて、すでに二名の生徒がお腹を押さえて空き待ちをしている光景があった。

アカリやイズミ、ジュンコがトイレから出てくるのを待つというのも一つの選択肢だったが、時間が掛かるのは間違いなかった。しかも知り合いとなれば、自分が切羽詰まったとしても急かすのは気が引けてしまう。故にハルナは、違うトイレを探す選択をした。

まず向かうべきは、一番生徒数の多い——言い換えればトイレの個室数も多い建物、すなわちゲヘナの第一校舎である。しかし部活棟を出て第一校舎に到着する頃には、トイレはすでに混雑が始まっていた。(一階はともかく、まさか三階のトイレまで全滅なんて……困りましたね、このトイレなら個室数も多いと踏んでいたのですが)

ゴロゴロゴロゴロ、グギルウウウグビビビ……、

発症から約六分。腹痛は一度も弱まることなく強まっており、最後

のトイレを回り終える頃にはもう、お尻にきちんと意識を配っていないと漏らしてしまうかもしれない程度には便意が高まってきていた。ハルナの発症した時刻は、ゲヘナ全体に比べればまだ早い方に分類される時間帯だった。というのも、今朝の食堂にできていた行列で先頭にいたのがハルナ率いる美食研究会だったのだから、最後尾の生徒が食堂に入るまでに一時間以上を要したことを思えば、ハルナたちの発症が早いタイミングだったのも半ば当たり前のことだった。

早い方だったといえど、人数が千人近くなる大規模な集団食中毒の中では、ハルナたちよりも早いタイミングで催す生徒も一定数は存在する。そういった生徒たちによって、すでに第一項者のトイレの個室は全て占拠されたあとだった。

(並んでいる人数はまだ二、三名程度でしたが……先客の具合を考えるとあまり良い選択にはならないかもしれせん)

最後の希望を持って訪れた、三階の大講義室の横にあるトイレ出る前に、ハルナは後ろを振り返る。個室は五つ横並びになっていたが、もう聞こえてくる音はどの音がどの個室から響いてきているのか、聞き分けることは完全に不可能だった。

ビチビチビチ——ブジュルルル——ブポポオポブウウウッ！

(……本当に、大事件かもしれませんね)

扉を押し開けて外に出てくる瞬間にも、一人の生徒がまた入れ替わるようにトイレの中へと入る。すでに埋まった個室と出上来がりつつある列に「えっ……」と戸惑いつつも並んでいく姿を見ながら、ハルナはそつと扉を閉じた。

もうトイレが全部埋まっているとあれば、この建物そのものに用が

ない。階段を降りて一階へと向かいつつ、ハルナは次に向かうべき場所について考えていた。

「ゲヘナ中央区にある建物といえば、後は第二校舎か、それとも旧校舎か……」

ゲヘナの全体図を頭の中に思い浮かべる。第一校舎自体はゲヘナ中央区の中でも比較的真ん中のエリアにある。ここから次に行くことのできる校舎、もといトイレとしては、筆頭候補はその裏にある旧校舎だった。或いは校舎を出て左に向かえば、程なくして第二校舎に向かうこともできるだろう。どちらも、第一校舎に比べれば人数は少ない。それ以外にも、ゲヘナ中央区には建物があるが——そのいずれも、ハルナが向かうことのできる場所ではなかった。

「運動場にもトイレは設置されていましたが……個室は二つくらいしかありませんでしたわね。第一校舎がこれだけ混んでいると、二つしかないトイレは……」

第二校舎から少し南に進んだところには、広い運動場がある。しかしこれは生徒が滞在することを想定している場所ではないため、トイレの数などごく僅かだろう。

実際、ここにもハルナが足を運んでいたとしても——

「うう、んうう……っ！」

ピチピチピチピチボボボツジュルルルルルルッ！

「早くしてっ、漏れる漏れるっ」

「終わったら次私なんだからね、急いでよ！」

——と、そこにはすでに地獄というべき様相が広がっていた。

そして、もう一つ建物があるにはある。こちらは生徒であれば誰も

が入ることができる場所であるし、トイレもきちんと相当な数が用意されているのだが。

「風紀委員会の本部だけは、行くだけでトイレどころではない騒ぎが起こりそうですわね」

もはやテロ集団と認識され、温泉開発部と並んで二大テロリストとすら呼ばれることのある美食研究会。その頭たるハルナが、何ら目的もなく——いや、トイレという重大な目的はあるのだが——風紀委員会の本部にのこのこと顔を出せば、それはもうハルナを捕まえようとするに違いない。どちらにせよ、トイレに入るといふハルナが目下一番重要と考えている目的は、達成できなくなる。

故に選ぶべき選択肢は、第二校舎か旧校舎の二択。

「……では第二校舎にしましょうか。旧校舎よりはお手洗いも綺麗ですし。それに、旧校舎には——」

一階に降り立ったハルナは、旧校舎へと向かう裏口ではなく正面の出口から校舎を出ることにした。薄っすらとパニックが起きかけている校舎の中とは違い、外は至って平穏な、日常的一幕というべき光景が広がっている。

本当に大事件が起きているのか、これはたまたま、昼食後の何かでトイレが大混雑しただけではないか。そう信じていたい気持ちも、ハルナの中にはある。そのかすかな希望を信じて、ハルナは第二校舎へと歩みを進める。

「——万が一のときは、出くわしてしまってもいいから」

痛むお腹に手を当てつつ、ハルナは左後ろを振り返る。第一校舎の少し脇には旧校舎が見えるが、ハルナが気にしているのは更にその奥

の存在だった。旧校舎より更に向こう側にあるのは、今朝に及ばずハルナがほぼ毎日足を運んでいる、ゲヘナの学生食堂。

「——フウカさん、無事だと良いのですが」

その食堂のすべてを担っているの一人の生徒に思いを馳せながら、ハルナは第二校舎への道を急いだ。



臨時の営業を終了して二時間ほどが経った食堂の厨房では、巨大なシンクの中でずつと水が流しっぱなしになっていた。シンクの中に置かれたいくつものプラスチックケースの中に置かれているのは、カレー皿、カレー皿、カレー皿……と、大量のスプーン。

食堂を営業する上で一番最後の作業は、この洗い物だ。おまけに大量のカレーを作る際に使用したいくつもの大きな鍋もまた、この洗い物戦争においては非常に重い負担となつてしまっている。

(洗っても洗っても終わりそうな気配がしないわね……)

かれこれ一時間近く、フウカとジュリはひたすら洗い物をしている。食器洗い乾燥機もフル稼働しているのだが、三台ある機械ではまるで追いつかない量の洗い物は、ようやく終りが見えてきたところだった。カレーを提供する側のフウカとジュリだったが、もちろん完成したカレーを提供する前後のタイミングでその中身を口にしてしまっている。働き続けている彼女たちにも、もちろんその毒素は猛威を振るっていた。

ゴポポポポポポッ……ギョルルルルルッ……。

「……っ、フウカ先輩、洗う皿ってあとどれくらいですか……？」

水道の音に隠れて、何やら不穏な音を立て始めたのは食器の方を担当しているジュリのお腹だった。お腹の鈍い痛みや違和感ほう一五分ほど前から感じ始めていたが、このタイミングになりいよいよ、言い訳のできない便意となつてジュリを襲っている。皿の残り間英数をフウカに確認したのも、それは洗い物が大変だからではなく、もっと重大な——トイレに行きたいという欲求からの質問だった。

「えーと、あと百枚くらいだけ……ジュリ顔色悪いよ、大丈夫？」

「すみません、あんまり大丈夫じゃ……すぐお腹痛くて……」

お腹をさすりたくても、洗い物をしていてびしょびしょの両手では拭くに触ることができない。弱々しい声で、ジュリはついに自らの欲求を願ひ出るしかなかった。

「フウカ先輩、お手洗いにいつてきていいですか……？」

泣きそうな顔をしながらそう訴え出るジュリは、顔色も悪く普段の元氣そうな素振りが全く見られない。調子を崩しているのは明らかで、時折体をくねりながら皿洗いをしていたのは、便意を我慢していたかたにすぎなかった。

そんなジュリを見かねて、フウカも離席を許す……かと思いきや、フウカが取った行動は、皿洗いをするための水道の蛇口を止めるという奇妙な行動だった。

「フウカ先輩……？」

頭の上に疑問符を浮かべつつ、ジュリも手元の蛇口を止める。水の音がしなくなった厨房に響いたのは、お腹から響く重低音——けれど、もその音の出所は、ジュリの下腹部だけではない。

「ごめんジュリ、実は……私もちよつとトイレ行きたくて。さっきからお腹痛かったんだよね」

きゆるきゆるきゆるきゆる。ゴロゴロゴロオッ!

フウカが告げたちようどその瞬間に、フウカの下腹部からもまた、ジュリと同じような音が鳴り響く。フウカは苦笑いをしつつ、ペーパータオルに手を伸ばす。ジュリも同じように手の水分を拭き取ってから、二人揃って厨房の出口へと向かう。

「ジュリ、一緒でもいい？」

「はい……っ」

誰かに自分のお腹の具合を伝えるのは、本当であれば相応に羞恥心を惹起してしまう行為だ。だが給食部として食堂を切り盛りしている二人は、定期的に検便などの健康管理が義務となっている。今更、恥ずかしいと思うこともほとんどないらしい。フウカもジュリも自分のお腹に手を当てながら、厨房を出てこの建物で唯一のトイレである、利用学生向けのトイレへと向かう。

「フウカ先輩がお腹痛いなんて、珍しいですね」

「それは、ジュリもそうじゃない？ 一応気をつけるようにしてるから、確かに久しぶりだけど」

「そうでももんね。お腹痛かったら基本的に厨房に入っちゃダメですし……」

「そうそう。だからここまでお腹壊したのなんて、久しぶり……」

「……フウカ先輩？ いったいどうしたんで……す……」

毎日自分に体調について記入しているチェックリストのことを思い出しながら、二人はトイレに入ろうとする。少し先にトイレに着い

たフウカと、その後ろについて歩くジュリが絶句したのは、ほぼ同時……食堂のトイレのはるか外にまで伸びている、やけに長い行列を見たときだった。

「あれ、このトイレって、こんなに並ぶような場所だったっけ……」

「いえ……そんなはずは、というか皆さん、体調が優れないような……」

ジュリの言葉を聞いてフウカも行列に並ぶ生徒達のことを観察する。確かにどの生徒を見ても、顔色はあまり良くない上にお腹に手を当てている人ばかりだった。しかもその人数は、トイレの外に並んでいる人数だけでざつと五、六人ほど。

一応トイレの中も確認しなければと思い、混乱するジュリを置いてフウカは列の横をすり抜けてトイレの中に入っていく。だがすぐに、見なければ良かったと後悔するような光景が、そこには広がっていた。

「早くして……早くっ……」

「ふうっ、漏れそう、お願いだから急いで……っ！」

ゴロゴログリリリリギユウウッ！ おぼおっ……っ！

トイレの中に並んでいたのは、外から見えた人数に加えて更に四人。その全員がお腹を押さえ、そして列の後ろ側で並んでいる生徒達よりも遙かに切羽詰まった様子で得意にもだえ苦しんでいた。先頭に並んでいる風紀委員の女子は、普段であればどこかの誰かに拘束されたときには非常に頼りになる戦闘力の高い生徒だというのに……今はその面影はどこにもなく、便意と腹痛を前に弱り切った一人の女子生徒に過ぎなくなってしまう。

そして三つ横並びになっている個室の方は、もつと悲惨だった。

「ん〜、ああ……痛い……っ！」

プポッピチピチピチチチチ、ドボドボッ！

このうめき声が、どの個室から聞こえているのかも分からない。排便の音も同じで、波の強弱があるのか三つの個室からそれぞれ互い違いに聞こえてきているようにすら思える。だが一つだけ確かなのは、どの個室もまだ当分使えるようになる気配がないということだけ。

それでも列に並び続けている、全部で九人の生徒の横を通りながらフウカはトイレの外に出てくる。臭気が強くなりつつあったトイレの中に比べて清潔な空気を吸って一安心したところへ、お腹をさすりながら不安そうな顔を浮かべているジュリがゆっくりとした足取りで近寄ってくる。先ほどよりも、ジュリの顔色はまた悪くなっているように見えた。

「フウカ先輩……トイレ、どんな感じですか……」

「なんか、みんなお腹痛いみたい……トイレの中も、まだ交代できなさそうな感じだった」

「そうですか……どうしたら、いいんでしょう……」

ギューー……ゴロロロロロオッ！

そう言いながら、ジュリはまたお腹を抱えてぎゅっつと目を閉じる。まだ「お腹が痛い」としかフウカにも伝えてはいないが、内心ではもう強烈な便意を催していた——ただそれを、我慢できないというのは、体調を報告し合う間柄だったとしても、恥ずかしいことだった。

「ジュリは……その、我慢できそう？ ここに今九人いたから、トイレはあと三周しないと入れなさそうだけ……」

「そんなに、我慢……」

並んでいる九人に対して個室は三つあるから、単純な計算で三人が順番に使うだけの待ち時間が掛かることになる。普段通りのトイレであれば、それはせいぜい五分くらいの長さなので我慢するのもさほど難しくはないだろう。

だが、今回はどうだろうか。一人が用を足し終えて——お腹が落ちて出てくるまでに、少なくとも五分以上は見積もらなければいけない。どんなに短くても、今から並んでジュリたちがトイレに入るまでには、二〇分近く我慢することになるだろう。先客の具合次第では、三〇分我慢しても入れないかもしれない。

それだけの間、下着を無事を守るができるかと言われれば。

「無理、です……もう、あんまり我慢が……」

「だよね。私も。……他のトイレ、探そう」

「……はい」

やや元氣のない声ながらも、フウカは必死にジュリを励まし、その手を取る。ジュリもフウカに手を取られながら、重い足取りで食堂へとにした。

食堂から飛び出したフウカが目指すことのできる場所は、もはや一箇所しかなかった。一番確実なのは自分の部屋があるマンションまで引き返すことだが、片道一五分近くは歩かなければたどり着けない。それまでに限界を迎えるのは明白だった——そして何より、自分とジュリの双方を助けるという目的が、トイレが一つしかない自宅では達成できない。

そうなれば、この食堂から最も近い別の施設を目指す必要があった。ゲヘナ中央区のこれまた中央に建っている第一校舎から見れば、食堂





それでもなお、下腹部の痛みは全く持って消えていかない。それどころか、出口で我慢していた軟便を開放したことで新しく空間が確保され、大腸から直腸に送り出されていく、下痢便が動くスペースができて生まれってしまった。下痢便が腸管を激流となつて流動し、出口に向かって移動してきている。

(お腹が、痛い……まだ出そう……フウカ先輩のためにも、早く出ないといけないのに……)

プウウツ、プビブビブボオオオツ、プバババババツ!

(うう、つ……!! フウカ先輩、ごめんなさい……)

心のなかで懺悔をしながら、ジュリの排泄は続く。

その音はもちろん、フウカの耳にも届いていた。

(ジュリ……お腹、痛かつたんだね……。これなら、譲つてよかつた)

ゴポポポ、ギョルルウウウ……ツ、ゴロロロ……!!

ジュリを無事に個室の中に押し込んだことで、フウカの顔からは再び笑顔が失われていた。トイレで激しい音を立て続けているジュリへの憐情と、それと同時に自分自身が置かれた状況への絶望感が、時折漏れる小さなため息の中に込められている。

右手でお腹を擦りながら、何度目か分からない便意の波を押し返すべくお尻の穴にぎゅつと力を入れる。波が襲つてきて、それを追い返すたびにお尻の穴には力が入らなくなっていく、それとは対照的に便意の波はどんどん激しいものへと変化していく。

ギョルルルル……ツ……ゴポポポポポポポツ。

(はあ、おさまった……このままじゃ埒が明かないけど……だけど、他のトイレに行つても並んでるし、これならまだ、その人が出てき

てくれれば私が入れるし)

なんとか便意の波を乗り切つて、フウカはわずかに思考回路の余裕を取り戻す。それから今度は自分が置かれた状況を思い返して、何か有効な策はないかと必死に考える——だが考えても考えても、もうアイデアは浮かんでこなかった。得られる結論はただひとつ、目の前の個室——元々閉まっていた奥側の個室が空くの待つのが最善ということだ。

「ん、つ……ふうううつ……。あ、んうう……っ!」

プ、プビツ……ピチチ……。ピュツ! プウー……ツ!

そちらの個室からの音に耳を澄ませる。途切れ途切れに聞こえていた破裂音は、ある時間を境に突然再び激しいものに戻つてしまつていた。まだ時間がかかるだろうか——そう思いかけたフウカの耳に聞こえてきたのは、予想だにしない音であり、けれどもそれは希望に満ちた音だつた。

(この音……紙、取つてる!? ってことは、もうすぐ……?)

トイレに入った瞬間にすでににおいは広がっていたから、もう先客はかれこれ長い時間トイレに籠っていたのだろうか。或いは比較的、症状が軽かつたのだろうか——今のフウカにとって、そんなことはどうでもいいことだつた。目の前のトイレが、もうすぐ空く。それ以上に大事なことは、何もない。

ドア越しに聞こえてくる、ペーパーホルダーの金属音。そしてフウカは、同時に自分の後ろにあるトイレ自体の入口のドアの向こう側から、足音が迫つてきているのにも気がついた。なぜ、その小さな足音に気がついたのかは、フウカ自身が知る由もない——それが聞き慣れ



によるものだとはい、きつと認めたくないだろう。

(誰か来る……ごめんね、知らない人だったら、苦しいけど先に入らせてもらわないと)

そんな事を考えながら、最後の一踏ん張りとはかりにお尻の穴を開め直す。目の前の個室のドアが開くよりも前に、その足音はトイレの中に入ってきた。

フウカにとつてまたも想定外だったのは——やはり、その足音の主である。

「——フウカ、さん……？」

幾度となく聞いたその呼び方をする生徒を、フウカは一人しか知らない。



第二校舎のトイレに広がっている惨状は、まさに絶望そのものだった。校舎に入って真っ先にハルナが向かったのは一階にある一番大きなトイレだったのだが、そこはもう満室——個室はたっぷり七つもあるといふのに、である。

ブジュルルルルル——バシャバシャバシャビヂヂヂヂッ！

聞き飽きた水っぱい破裂音が、トイレのドアを開けたハルナを出迎えてくれる。一様に閉じられた個室の扉の向こうからは、常にどこかしらから絶え間なく激しい脱糞の音が響き続けていた。誰一人として例外なく、下痢をしているの言うまでもない。

それに加えて、個室のあるエリアよりも更に手間に伸びている順番

待ちの列。個室の数を超える九人の女子生徒が、便器を求めて集まってきた。

「やば、いつ……出そう……」

「我慢しなきゃ……お願い、誰でもいいから代わって……」

「出るっ、ああ……っ、はあ、はあ……次にしたくなったら、本当にだめかも……」

ぐるぐるぐるぐる……ごろごろっ……ぎゅるびいっ！

ぶぶうっ、ぶすすすっ！ ぶぶうっ、プリプリッ！

全員がお腹かお尻の片方、あるいは両方を手で押さえながら列を作っている。これまた聞き飽きた大腸の奏でる重低音と、時折混ざる放屁の音が彼女たちの壮絶な我慢を物語っている。体を硬直させながらじっと何かに耐えつつ、たまに放屁の音を奏でる女子は、おそらく便意の波が高まってきたところなのだろう。

順番待ちをしている女子達はみな、第一校舎に並んでいた女子達よりも明らかに切羽詰まっているようにハルナには思えた。それも仕方のないことで、第一校舎に比べれば第二校舎はもとも使う生徒も少なく、立ち入る生徒もあまりいない校舎——だからこそ、トイレは空いている可能性が高かった。

しかし現実とは真逆で、第二校舎のトイレも第一校舎と同じようにお腹を下した生徒達で大混雑している。すぐ隣にあって、人の少ない第二校舎に行けばトイレが空いているはずという「安直な考え」に縋った生徒の数は、少なくなかったということだろう。

あるいは、そんな考えに縋らざるを得なかった生徒も。

「え、こんなに並んで……。あ、あのっ、先に入れて貰うことはでき

「無理、私だってお腹が痛い、我慢が……」

「無理、私だってお腹が痛い、我慢してらんだから……あんたもちゃんと並びなさいよ……」

ちよどトイレに入ってきた一人の生徒は、広いトイレの中にできていた大行列に驚きの表情を隠せない。あえなく順番交渉をはねのけられた彼女は列の最後尾に並び直すが、お腹を絶えずさすっている姿はもう限界寸前そのものである。横から見れば、それは可哀相な光景でもあったが——しかし彼女の前に並ぶ女子も、同じような戦いを強いられている最中である。彼女も彼女でまた、自分の下着を守るのに手一杯だったのだ。

全部で十人になった行列のうち、何人が無事に個室に入れるのだろうか。見ているだけで胸が苦しくなりそうな空間から、ハルナは半ば逃げるように飛び出した。階段を上り、もはや希望すら抱かずに二階のトイレに向かう。

(こちらも、やはり満員ですか……)

一階のトイレに比べると小さく、個室が四つあるトイレ。もちろん全てが埋まっており、並んでいる人数は六人だった。先頭の女子はよほど限界が近いのか、自動拳銃を手にしながら一番手近な個室に向かって物騒なことを叫び続けている。

「いい加減出てきなさいよ、こっちは限界なのっ……出てこないと撃つわよ!」

「馬鹿なことというのはやめて、私だつて籠もりたくて籠もってるんじゃない……うう」

ピチピチピチピチピチ!! プリュウウウー……!!

「無理無理むりむりいいっ、マジで漏れる……あんた出てきたら一発撃つからね!」

所構わず爆発物や銃を扱うことの多いハルナでさえ、トイレの中で自動拳銃を手にする生徒を見るとは思いもしなかった。しかし先頭の彼女も、便意の強烈な波が来てしまったのか、拳銃をしまつてまたきりにお腹をさすり始める。個室のドアを叩き続けることすらできないくらい、便意の波は激しいようだった。

物騒だから、というわけでもないが、ハルナはこのトイレを離れることにした。歩いているうちに、自分自身の便意もどんどん高まってきた。三階への階段を上りきったとき、ハルナはそのままでは耐えがたい波に襲われた。

キュルキュルキュルツ、ごろごろごろおっ……。

(便意が……お腹が、痛いですわ……一度、立ち止まりましょう) 歩き続けることに困難を感じて、ハルナは一度大きな柱を背にして立ち止まる。軽く後ろに体を寄りかからせながら、ハルナはお尻の穴に押し寄せてきた便意の波を押し返すのに注力した……いや、注力しなければいけなかった。

最初にお腹の違和感を覚えてから、すでに一五分が経過している。もともとハルナはお腹が丈夫な方ではなく、お腹を緩ませるのは比較的日常に近いことだった。とはいえ、いくら我慢に慣れているといっても、食中毒クラスの猛烈な下し方になってしまえばやはり我慢にも限界が訪れる。時間の経過とともにハルナも追い詰められ、他の生徒と同じような具合に陥りつつあった。

ゴポポポポポポ……ギョル……

(周りには、誰もいませんし……少し、はしたないですが)  
ぶううう~~~~つ、ブブツ、プビビビ……ぶうつ!

周りに誰も見当たらず、そして柱を背にしているのをいいことに、ハルナは少しだけお尻に掛けている力を抜く。直腸に溜まっていたガスがある程度抜けて、お腹からの圧力にも若干の余裕を取り戻すことができた。程なくして背中側と足下からのおいが漂ってくるが、もはやトイレでさんざんにおいを嗅いで鼻が麻痺しつつあったハルナにとつては、たいした苦ではなかった。

少しお腹が落ち着いてきたところで、ハルナは再び足を進める。三階にあるトイレの扉を開けたが、そこもやはり同じような地獄が広がっていた。

「はあ、ふううう……つ!」

ニルニルツ、プリーツ! ブチュブチュプビビイイッ!

ドアを開けるなり、一番手前側の個室から猛烈な音が響く。こちらも四つある個室は全て使用中となっており、ちょうど同じ人数である四人が並んでいるところだった。こちらもかなりの行列といっても差し支えないが、それでも見てきたトイレの中では一番短い順番待ちの列でもある。一瞬だけハルナは、トイレを探して彷徨い続けるくらいなら、ここで順番を待つ方が良いかとも思った。

ふと、後ろをたまたま振り返った先頭の女子と目が合う。ハルナは最初こそ見間違いだと思ったが、頭にかぶっている帽子は見間違えようもなかった——まごう事なき、風紀委員であることを示す衣装だった。

ハルナが何か行動を取るよりも前に、風紀委員が何かを言いかける。

何かハルナに向かって言いだそうとして、しかしその口は開かれなかった。その瞬間、彼女は代わりに両手でお尻をつかむように押さえ始めたのだ。

「~~~~つ! ……………つ、ん~~~~つ……………」

体を少し動かしてしまつたことで、鳴りを潜めていた便意の波が再びぶり返してきてしまつたのだろう。限界を超えそうなくらい激しい便意の波に襲われているのは、ハルナの目から見ても明らかだった。普段は敵対することの多い風紀委員ながら、なんとか頑張つて欲しいとハルナもどこかで思つてしまう。

だが、彼女は限界を超えた便意に、抗いることができなかった。ブジュウーッ、プビビビビビビビビビビ……。

水気の多い何かが弾けて、布地に当たる音がする。トイレの中から響いてくる音にしては、明らかに小さい音であるそれは——もう、何が起きているのかを過不足なく物語っている。

ハルナが視線を下ろし、風紀委員の彼女の臀部を確認すると、彼女のスカートは一部分が異常なまでに濃い紺色に変化しており、それと同時に、その部分を押さえている両手が酷く震えているのが分かった。

「ああああ……つ、ああああ……………」

何か、言葉にならない音が聞こえてくる。その場にいられなくなつたハルナは、トイレをゆつくりと後にすると、そのまま階段を降りて第二校舎の外に出た。

(残るは……旧校舎しかありませんわね……第二校舎よりは人がいないと……信じるほかにありませんが)

限界寸前の便意を抱えながら第二校舎から第一校舎へと移動する。

お腹を下しながらトイレを探すという状況に比較的慣れているハルナだからこそ、自分の限界を見極めつつ、お腹を刺激しないように移動することができた——一般の生徒であれば、猛烈な便意を抱えながら何度も歩いて移動することなどできなかっただろう。

旧校舎に向かう最短ルートは、途中で第一校舎に入り裏口から出ることだった。先ほど辞した第一校舎の中に再び戻り、裏口を目指す。第一校舎が建設されている場所にやや傾斜が掛かっているために、裏口自体は一階ではなく二階にあった。階段を上ってから裏口に無空く途中には先ほども一応巡回したトイレがあり、ハルナは希望などないと思いつつも、一応中を確認することにする。

……結果は、更に悲惨なものだった。

ブウウウツ、ブビビビチチチチチヤビチャビチャッ！

一人か二人は入れ替わったのかもしれないが、依然として大半の生徒が激しい便意を我慢する苦しい状況下に置かれているのには変わりなかった。五つの個室に対して、並んでいる人数はもはや二十人を超えようとしている。全員がお腹を抱え、呪詛のような言葉や不安げな独り言を呟きながら、来るかどうか分からない自分の番を待ち続けている。

列の最前方——トイレの敷地の中、個室が見える位置に並んでいる女子は、更に悲惨な状況だった。催してから我慢している時間は彼女たちの方が圧倒的に長く、それ故に列の後方に比べればお腹の具合はより追い込まれている。行き場のない怒りと焦りは、当然個室の中で排便している最中の女子達に向けられていた。

「いい加減出てきなさいよ！ いつまで待ってればいいのよ……」

「ちょっとでいいから代わってよ……もう無理だってば……」

怒りであったり弱音であったりをぶつけられる個室の中では、今もなお激しい脱糞の音が響き続ける。どの音も激しさが常に変化しているが、ゼロに落ち着きそうな気配は見えない。

「……くっ、ふう……！」

「んうう……、はあ、いた……ああっ！」

ブボボボポッドポッドポドボ！ ブッビィィィィッ！

その中で音を響かせている一つの個室は、先頭から時折激しくノックを受けていた。

「アンタまだ終わらないの!? 早くてできて代わってよ、風紀委員なんてでしょ？」

「そ、そうはいつでも……すみません、まだ治らないので、あああっ！」

ブチュ、ビチチチィッ……ピュルルルルバツ！

風紀委員、という言葉が聞こえてきて一瞬ハルナも身構えたが、直後に聞こえてきた声には聞き覚えがないわけではなかった。風紀委員会の救護担当、火宮チナツ——前戦で戦うハルナにとっては、直接相手するわけではないものの名前だけは知っている。元救急医学部の彼女ですら、為す術なく便器に座って下痢便を嘔き出し続けることしかできていない。

それを知ったところで、ハルナの状況が好転するわけではなかった。むしろどうやってもこの腹痛からは逃れられず、便意を解消するにはトイレに何とかしても入るしかないということを確認させられ、ハルナはトイレを後にする。裏口から出たあとは、旧校舎へとつながっている細い道を進んでいくだけだ。

ぐぎゅるるる……つ、ゴロゴロゴロピーーッ！  
 (……つ、また……はしたないですが、ここなら誰もいませんし)

歩き出してすぐにハルナは、再び猛烈な便意の波に襲われた。進むことすらままならなくなって、立ち止まってハルナはお腹をじっとさせる。息を少し荒くして苦しそうな表情を浮かべつつ、また便意の波が盛り上がった瞬間に、ハルナはお尻に力を入れた。

ブリリリリッ！ ブッ、ピチピチ、ぶーっ……。

建物の中ですらなくなつて、いよいよ大きな音を立ててハルナは放屁する。音が大きくなったのは、半分は遠慮のなさと、もう半分はもうコントロールが効かなくなつてきたことの証であり、その水つばい音はトイレの中で個室の方から響く音とそう大差なかった。

(もう一回……もう、まともに我慢ができていませんね)

ガスを出して圧が下がると思いきや、空けたスペースにさらにガスが流れ込んできて圧力がすぐに高まっていく。たちまち我慢ができなくなつた強烈な便意——いや、ガスを出したいという欲求を前に、ハルナは再度お尻の穴を緩める。

ブブッ、ブピッ！ ブシューッ……ぶぶぶうっ！

周囲に広がるにおいては、まるでトイレのようだった。先ほどまで巡り歩いたトイレの中と、今ハルナの周囲に広がっているガスが持っているにおいには、そう大差がない。このにおいを公衆の面前でぶち撒けるような事態に陥っていたら、ハルナはきつと顔を真っ赤にしていたところだろう。

救いなのは、子の周囲には誰もいないという一点だった。ごく一部の人間しか知り得ないような、茂みの中をかき分けて旧校舎の出入り

口と第一校舎の裏口を結ぶ獣道には、通行人など誰もいない。

(ここで、もう……空いてもいないトイレを探すくらいでしたら)

周囲には誰もいない。それはガス抜きをしてもいいと言いつても聞かせることのできる場所であり——更にそれよりも過激な行為があつても、見咎める人間がいまいというところであつてしまふ。

この場で下着を下ろしてお尻を剥き出しにしてしやがみ込んだとしたら、腹痛と便意を我慢する苦悶の時間から解放されることができ……どうしても、時折そのことが頭をよぎる。

(いえ、やはりそんなことが赦されるはずがありませんわ。それに、万が一人が通れば……恥ずかしい、どこの騒ぎではないことになつてしまいますわ)

誘惑とすらいえないなにかの感情を押し殺し、ガス抜きを繰り返しながら獣道のような道を通り、草むらをかき分けて旧校舎を目指す。およそ三分ほどの道のりを乗り越えて、なんとかハルナは旧校舎にたどり着くことができた。ドアを開けて中に入るが、人の話し声は聞こえない。

(人がいそうな気配は少ないですわね……。確かトイレは二つでしたから、最悪どちらかでも空いていればそれでかまわないのですが)

グギョルルルグギギギギギョルピィィッ！

無人の廊下で、ハルナの足音とお腹からの音が響く。途中で小刻みな放屁を二回ほどしてしまつてから、ハルナは廊下の一番奥までたどり着いた。

どうか、トイレが空いていますように——そう願いながら開けた扉の先には。

「——フウカ、さん？」

すっかり意識の埒外に行ってしまったフウカが、腰を曲げながら個室のドアの前で便意を堪えていた。

「……ハルナ？」

聞き覚えのありすぎる声に、フウカがゆっくりと顔だけを振り向かせる。そこにはほぼ毎日顔を合わせるハルナの姿が——けれども普段の優雅さなど微塵もない、お腹を押さえお尻を突き出しながら進んでくるといふ哀れな姿で立っていた。

「まさか、本当に出会ってしまおうとは、思いませんでしたわね……」

「ハルナ……もしかして、ハルナもお腹が痛くてここに？」

「ええ。恥ずかしながら、他のトイレに並んで順番を待つ余裕がありませんでしたので……その様子だと、フウカさんも、ですか？」

「うん。食堂のトイレが満員で……それでここに」

「そうでしたか」

状況を突き合わせるまでもなく、フウカもハルナも現在何が起きているのかをほぼ正確に把握していた。少し息を整えたハルナが、フウカの後ろに並ぶ。あくまで自分の真後ろに立ったハルナを見て小さくため息をついてから、フウカは言葉が続けた。

「……ハルナはお腹、どうなの？ まだ我慢できそうなの？」

「我慢ができるのであれば、私はきつと他の校舎のトイレに並ぶ選択をしていたと思いますわ。……そういう、ことです。フウカさんは」

「私？ 私はね、うん……」

大丈夫、と言おうとして、フウカは少し口をつぐんだ。お腹が大丈夫と言ってしまったら嘘になる。だが余裕がないと正直に打ち明けてしまふのは、やはり恥ずかしい——そして同時に、この後どういうこと

になるのかは、言われなくても想像がつく。

急に口を閉じてしまったフウカを見て、ふと口を開いたのはハルナの方だった。

「フウカさん、こちらのトイレは……どちらもずっと開かないのですか？」

「ううん、片方は空いてたけど、ジュリがいたから。こっちはジュリが入ってる」

「そうですか……ジュリさんが」

ビュルルルルルルッ！ ブチチチチチチッ……！！

トイレの中に現在響いている破裂音は、全てがジュリのお尻から放たれているものだった。未だに排泄の第一波すら終わる気配が見えず、ジュリの肛門からは絶え間なく下痢便とガスが便器に向かって注ぎ込まれ続けている。苦しい息遣いの声までは個室の外には届かなかつたが、フウカもハルナもその大変さを想像することはできた。

もう一つはどうなのか、と言おうとした矢先に、響いたのは水の音。その直後にはトイレの扉が開き、中からげっそりとした顔の女子生徒が出てきた。そしてフウカとハルナの二人がトイレの中にいるのを見るなり、そそくさとトイレから出ていく。

「……フウカさん、入らないのですか？ お腹が痛いのでしょうか？」

「そりゃ、お腹痛いしトイレは使いたいです……でも……」

ハルナはどうするの、我慢できるの、と問おうとしたフウカは、しかしその先の言葉を紡ぐことができなかつた。振り返った正面に立つハルナは、もう次の順番が回ってくるまで我慢を続ける覚悟を——たとえばどのような結果となったとしても、それを受け入れる覚悟をして

いるように見えた。

グルグルグビグビグビグビッ、ギュウー……ッ!!

そして何よりフウカにとどめを刺したのは、他でもない自分自身の大腸だった。眼前の扉が開き、洋式便器が視界に入ったことで脳が排泄という行為そのものを意識する。我慢から排泄へ、意識の不可逆な変化を開始したフウカの脳は、もう自らの直腸を肛門で押さえ続けることが絶対に不可能だった。

「ハルナ……ごめんっ、急ぐから」

そう言い残して、フウカは個室の中へと入っていく。まだ先客のにおいがしっかりと残っている個室に鍵がかかり、ドアには再び赤いマークが浮かんだ。

(フウカさん……いえ。これで良いんです)

グリリリリリッギョルギョルルルルッ!! ……ぶっ!

ドアを隔ててフウカの姿がハルナの視界から消えるが、それはまた逆もしかり。鍵がかかった瞬間に、ハルナは自らの両手を再びお腹に当て、しきりにさすり始めた。

フウカにお願いして、順番を譲って欲しい気持ちがないわけではなかった——そしてそれを言い出せば、きっとフウカは認めてくれてしまっただろうという確信もあった。その容認が、フウカに最終的にどのような形で返ってくるのか——容易に想像できる結末を、もちろんハルナも承知している。

結局のところ、被害者が自分からフウカに変わってしまっただけにすぎない。それを認められるかといえ、もちろんハルナにそれが受け入れられるはずもなかった。

ぶううう……ッ。ぶじゅっ、ぶうう……ッビッ。

(ジュリさんか、フウカさんが……出てくるまで、我慢。できるかどうか……)

これだけ痛み続けるお腹、それもすでに便意を感じ始めてから二〇分も経過した状況では、更にどちらかが排泄を終えるまでの我慢は絶望的だろう。ジュリは未だ第一波の排泄が終わっておらず、フウカに至ってはこれから便器に腰を下ろすところである。我慢するといつても、あと何分か、はたまた多数分か、それすらも分からない。

ぶりりりっ、ぶう……ッブッ、ブッ、ブ……ッ!!

不利を自覚した戦いは、始まった瞬間から絶望的な戦況だった。

放屁が止まらない。コントロールがきかなくなりつつある肛門が勝手に開いて、ガスをどんどん放出していく。生まれた直腸内の隙間に勢いよく下痢便が流れ込んできて、より強烈な便意となつてハルナを襲う。いくらお尻の穴に力を入れても、お尻の穴が閉じきらない。

頑張っても頑張っても、我慢ができなかった。

(もう、無理ですわね……お尻の穴が、勝手に……この歳になつてまさか、大便を漏らすことになるとは……とはいえ、これだけ大規模な食中毒ですから、仕方ありません)

もう、我慢し切るのは不可能だとハルナも本能的に理解していた。どこかに身を隠して、せめてお腹の中身を出し切ることできるような場所は——やはり、校舎から出て屋外にでもしゃがみ込むしかないだろうか。

そう思った瞬間に、金属音が響いたのであった。

「——フウカ、さ、ん……?」



「ハルナっ……いいから、ちょっとこっちにきて……」

「え、えーっと……?」

排泄が終わっていないどころか、排泄の始まった音すら聞こえてこなかった個室の扉が開いて、便座に座ったフウカがなぜかハルナを呼んでいる。状況が何も理解できないまま——しかしすでに混乱を極め麻痺しつつあったハルナの思考回路は、何かがおかしいと思いつつもフウカのいうことに従っていた。

開け放たれた扉の中に入ると、フウカが「閉めてよ」と言う。言われるがままにハルナは扉を閉めて鍵を掛けると、狭い個室の中でフウカの方を向いた。

「……私かジュリが出てくるのを待っていても、絶対ハルナは間に合わないでしょ。これじゃ少し、狭いかもしれないけど……私の前に座っていいから」

やや呆れた顔でそう告げるフウカは、ハルナから見ても確かに不自然な座り方をしていた。明らかに深く腰掛けており、そのためには足の間のショーツが邪魔だったのだろうか——グレーのショーツは、左足だけ外して右足のふくらはぎの辺りに、丸まったまま引つかかっている。少し深く腰掛け、前にスペースを作ることの意味が分からないほど、ハルナも鈍感というわけではなかった。

「フウカさん……それは、その……ありがたい、ですが」

「なに? 文句あるなら我慢しても浮けど」

「い、いえ! そうではなくて……ただ、恥ずかしいとか、嫌ではないのですか。フウカさんは」

ハルナからすれば、たとえ便器を強要するという不自然かつ不自由

な形であれ、これ以上我慢する必要もないというのは事実。恥ずかしい行為をフウカに晒してしまうという点はあれど、過酷な我慢やお漏らしといった、これをこえる苦勞のことを思えばこれは間違いなく飛びつくべき選択肢だった。

けれども誰かに利益が生まれれば、別の誰かに不利益が生まれる。トイレを開け、便器の半分を貸し出してくれたフウカには、逆に迷惑ばかりを掛けてしまうことになる……それがハルナにとっても、一番気になることだった。

「恥ずかしいに決まってるでしょ。私だってお腹痛いし、見られたくないわよ」

「でしたら……」

「でも。——別にイヤじゃ、ないから。ハルナが、漏らさないで済むなら、私は……汚いなんて、絶対に思わないから」

恥ずかしいというのが事実なのは、さっきまでよりも格段に顔を赤くしているフウカの顔が物語っていた。一緒にトイレに入って一つの便器を使おうというのだから、恥ずかしくないわけがない。それでもフウカは、そのはずか示唆を押し殺して、ハルナを痴態から救う選択をした。

「絶対、ですか」

「うん。絶対」

ハルナの理性が揺れ動く。ただでさえ我慢のできない便意を辛うじて抑えている肛門が、目の前にアルし郎党木を見ていよいよ細かく震えだす。フウカと同じように下着を脱いで足を広げ、この便器の上にお尻を曝け出したい——そう思ってしまったらもう、崩壊した理性は自

ブルアカ集団食中毒小説誌

# ゲヘナ学園と地獄の一日

---

[小説] できすとりん

[イラスト] めのりあ

---

2024年01月26日 電子版初版発行

発行者：できすとりん／サークル「食品不衛生委員会」

連絡先：dextrin162@gmail.com

<https://www.pixiv.net/users/42756764>

印刷所：株式会社ポプルス

本書の掲載内容（文章、画像など）の一部および全てについて、事前の許諾なく無断で複製、複写、転載、デジタル化などの二次利用を固く禁じます。



発行 / 食品不衛生委員会